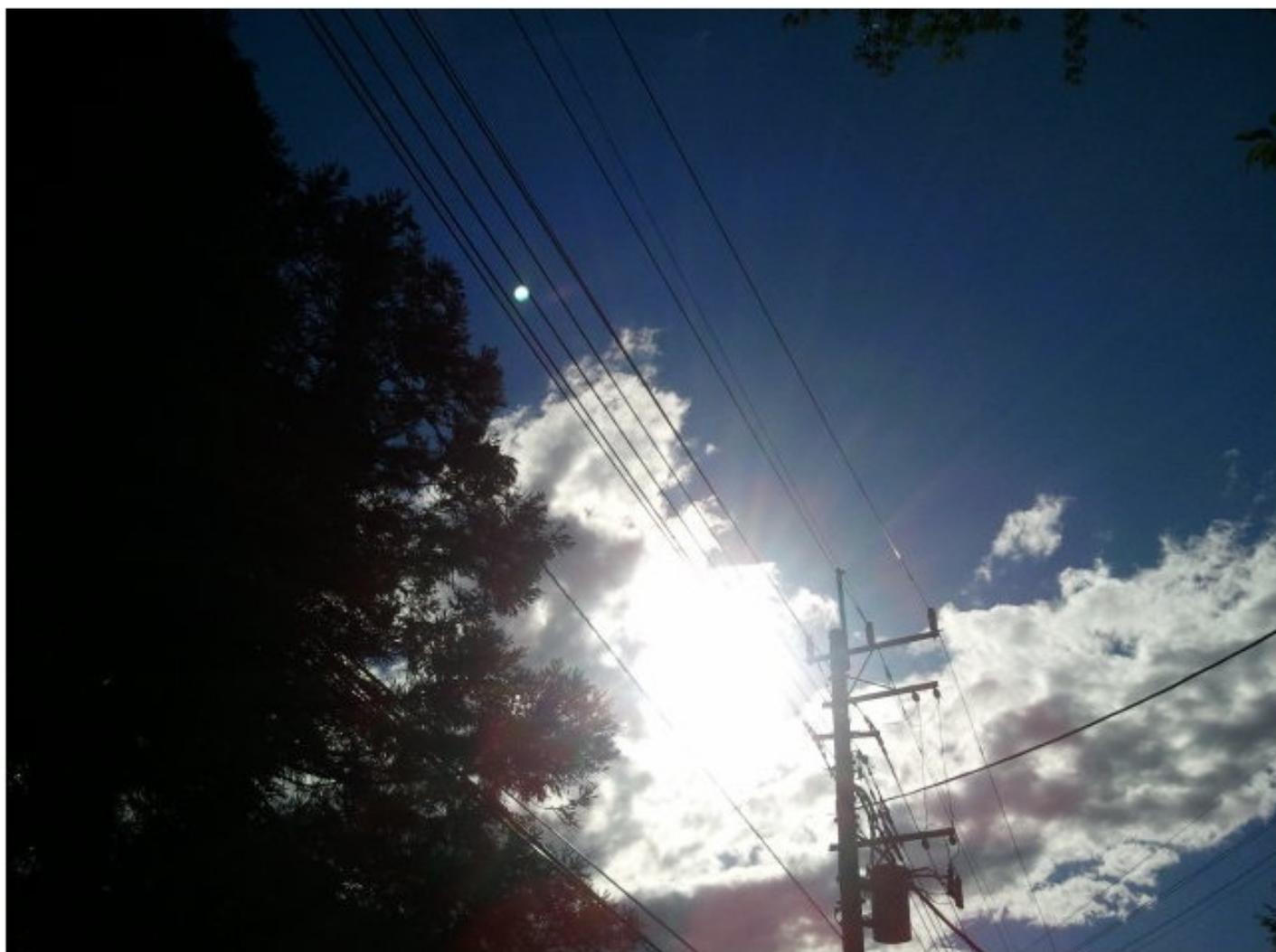


普通の高校生 になる為に



ヤマダヒフミ

@@@

部屋の中は暗い。僕がわざと電気を消しておいたからだ。僕の部屋は湿気と熱で、むんむんする。僕は机の上のリモコンを手に取り、エアコンをつけた。設定温度は二十六度。僕はエコ派なのだ。えへん。

さて。僕は今から、ノートパソコンを開いて、そしてテキストを打ち込んでいく。これから書く事は僕にとっては大切な事だ。だが、僕以外の人間にとってはそうではないだろう。それでも、僕は書かなくてはならない。どうしても。それは『必要な』事だから。

僕はノートパソコンの電源を入れ、そしてパソコンが立ち上がると文書入力ソフトを立ち上げた。そして、一行目からゆっくりと書いていった。息を一つ、大きく吸い込んでから。

0

なあ、君なら聞いてくれるだろうか？。僕の打ち明け話を。...いや、実際、そんな打ち明け話と
いうほどのものは、僕には存在しないんだけどさ。

最近、僕は小林秀雄に凝っていて、そいで小林先生はこんな事を言っている。『文学作品における告白とは人を食ったものに限る。人を食った告白など、生活では役には立たないが、文学の上では人を食った告白でないと役には立たない』。...まあ、僕の打ち明け話は別に、文学作品でもなんでもないんだけどね。これはただの戯言に過ぎない。そう、これはただの戯言。そうなんだ。これはただの戯言、くだらない、僕という青二才の雑言に過ぎない。

だけど、そんな僕にも、語りたい事の一つや二つあったっておかしくないだろうか？。なあ、君。聞いているかい？。僕の声。いや、まあさ、そりゃあ、僕のこんな話なんかより、ネット上で『

新しいアニメがアップされた』とか、『ジャニーズの誰々君の情報がヤフーのトップページに出てる』とかさ、まあ、僕も分かるよ。そういうことの方が、僕のこの戯言なんかよりずっと大切だって事はさ。でもさ、五分でいいから、僕のこの声を聞いてくれないかい？。いや、わかるんだよ。僕も。君の言いたい事は。確かに。・・・もう、全部くだらないって言うんだらう？。二十一世紀には芸術の天才はいない。もう、あらゆる音楽のフレーズ、コード、演奏法は全て試しつくされ、そして小説というものはもう既にドストエフスキーで頂点を極めた・・・とかさ。そう言いたいんじゃないかい？。君は。だから、君はこの僕の告白に対しても、すぐに日本語の間違いや三点リーダーの使い方の悪さを見て取って、眉をしかめて見せる。そして、君は次の瞬間にはネットのコメント欄に、こう書き込むんだ。

『内容は悪くありませんが、日本語の使い方ができてないので作品としては失格ですね。もっと、日本語を勉強されたらどうですか？』

なあ、僕は君に聞くよ。そんな事ならさ、僕は君に逆に聞こう。僕の日本語云々はまあ、いいよ。僕が日本語がまともに使えない片言の人間だって事はさ、まあ、そりゃあ認めるよ。はいはい。確かに、僕は日本語が下手くそです。コンニチハ。オハヨウゴザイマス。・・・でもさ、僕は君に聞きたいんだよね。君はさ、そんな事をわざわざネットに書き散らして、そして、そんな事で君の自尊心は満足されるのか、ってね。そりゃあ、君はこの世のなかのあらゆるものをこきおろす、そういう権利はあるよ。君には、確かにそういう権利がある。でもね、君は本当にそれで満足なのか？。君は・・・あれか？。ドラえもんで言うところの、独裁スイッチを持ったのび太みたいな存在なのか？。君は順に、あらゆるものをこきおろしていく。そして、そうやって、君以外の全てを否定し、破滅し尽くした後には、そのスイッチを持った君だけが残る。そして、最後に君は言うのか。『この私だけが素晴らしい』とでも。なあ、君。鏡を見てみろよ。タレントの顔をぐじぐじと批評する前に、君は顔を洗って、歯を磨いて、そして鏡を見るべきだと、僕は思うな。そうさ・・・そしたら、君もちょっとは黙る事を覚えるだろうさ。

あーあ。余計な事を言ってしまったね。まあ、いいや。これは僕の告白だ。だから、好き勝手にやるさ。まあ、最初に言ったように、告白するような、重みを持った内容なんか、僕の中にはこれっぽっちもないんだけどね。僕はさ、薄っぺらな存在だ。でもさ、それは他の皆もそうだから、許されてしかるべきだと思うんだよね。君はどう思う？。・・・まあ、いいや。僕はこれから歯を磨いて、眠るよ。実は明日の宿題をやらなくちゃならないんだが、もう僕の中にはやる気がないんだ。それというのも、君にこんな余計な話をしてしまったせいだよ。君、こんちくしょうめ。この野郎。ボカ、スカ。

まあ、冗談はさて置いて、さあ、僕の無限の物語が、これから始まるといいね。僕は、そう思っているんだ。僕は僕に期待している。僕に何が出来るか、僕に何が語れるか。まあ、僕の限界なんて、知れてるんだけどね。偏差値は五十四だしさ。・・・でもまあ、僕は僕の事を語ってみたいんだよ。他ならぬ君にね。例え、君がそっぽ向いていたとしても、僕はその君の耳に向かって叫びかけてやる気であるんだ。君は知らないかもしれないけど、「神聖かまってちゃん」というバンドに『ロックンロールは鳴り止まないっ』という曲があってね。あれは、そういう歌なんだよ。つまり、君が全部つまらないって言うから、だからこそ、その君に向かって僕はこうして

叫びかけてやろうという、そういう曲なんだよ。いい曲だしね。僕は、好きだな。

ところで、今、僕のパーソナリティというか、僕という人間にまつわる情報として、君に一つだけ教えておいたら、それは僕が高校二年生だという事なんだよ。・・・僕自身は僕が高校二年生でも、七十五歳の老人でも、あるいは三十九歳の婚約相手に捨てられて嘆き悲しんでいるアラフォー女性だとしても、まあ、どれでもいいんだけどね。僕は、自分が例えどういう人間になったとしても、やっぱりこんな風にくだらな事を喚き散らしているような、そんな気がするもんでね。ほら、匿名のネットの掲示板なんかだと、自分の年齢も性別もいくらでもごまかしが効いてしまうじゃないか？。でも、それでいて、その発言の主は存在する。・・・なあ、インターネットというのはなかなか面白い場所だね。そう思わないかい？。あそこでは、現実では抑圧されている憎悪や醜い感情や、あるいはその逆の綺麗な心性(こちらはごく稀にだけど)なんか透けて見えるようになってる。あそこでは、個人というのは、何か人間という檻から解き放たれた、一種の言語体みたいなものになっていると僕は思うんだよ。まあ、そんな風に考える事もある。

まあ、そんな下らない事はどうでもいいけどさ、とにかく、大切なのは僕が高校二年生だって事さ。僕のパーソナリティに関する話題は、それだけで十分。おいおい、僕がどこに住んでいるとか、どんな友人がいて、どんな生い立ちで、どんな名前だとか、そんな事はまあ、どうだっていいだろう？。別に僕は、『ライ麦をつかまえて』を真似ているわけじゃないぜ。もちろん、ホールデン君は僕の大先輩だけどさ。でも、ここで少し考えるとさ、年寄りになったホールデン・コールドフィールド君って、全然想像つかないよな。ホールデン君は永遠にティーン・エイジャーで、そしてテストにふざけた解答を出して、そいでタクシー運転手にわけのわからない質問をふっかける、そんな『永遠の青春少年』って感じがするもんな。ホールデン君が年を取るなんて、ありえないな。・・・でも、僕の考えだと、あの作者のサリンジャーさんは、正に年取ったホールデン君になってしまったんじゃないか、って気がするんだ。そう、だから、サリンジャー先生は『永遠の青春少年・おじさん』だったわけ。でも、おじさんになってグズグズ言うのもみっともないから、そのグズグズは、作品の中に持ち込まれて、それであの『ライ麦畑でつかまえて』ができた。・・・もちろん、これは全部、僕のでたらめ、当てずっぽうだよ。だから、信じちゃいけないぜ。そのの、純真なティーン・エイジャー君よ。

さあて、ここらで、この無駄話は止めようか。実は、僕がここで伝えたかったのは、僕か今、高校二年生って事だけなんだよ。そうなんだよ、言いたかったのは、ただそれだけなのさ。それが、こんな長話になっちゃって・・・。悪かったね。もう、君は君の好きなサイトを見ていいよ。そうだ、君の好きなバンドのCD、あれ、アマゾンで予約再開したんじゃないか？。いや、あれか。君は今、来月発売の新作ゲームのホームページを見に行く所だったな。呼び止めて、済まない。五分だけのつもりが、五分じゃすまなかったね。すまない。まあ、でも、いいんじゃないか。たまには、さ。僕が言いたかったのは、ただそれだけの事なのさ。くだらない事ばかり言って、本当に悪かったね。でもさ、ここは物語の終わりじゃないんだ。あくまでも、ここは物語の始まり。もちろん、僕みたいなつまらない人間に物語があれば、の話だけどね。僕はさ、時々思うんだよ。僕のクラスメイト達、皆には僕と違う素敵な物語や素敵な人生が用意されているのに、僕だけがそれから取り残されているんじゃないかって。時々、そういう気がする

るんだよ。本当にね。こうるさいリーディングの授業の後の休み時間なんかね、ふいと、そんな事を思う時もある。まあ、いや。では、これを始めとして、僕は僕について次から語ってこよう。でも、くれぐれも期待しないでくれたまえよ。これから僕の言う事には、これっぽっちも有益な情報とか、役に立つ何かは入っていないんだから。そんなもの、少しもない。大体、そんなのが読みたければ、ノウハウ本でも読めばいいさ。そこには、沢山書いてあるだろうからね。どうせ、書店に平積みされているよ。さて、では、僕はこの無駄話をやめよう。ではさて、僕は次から一体、どんな事を語るのか……。いやね、僕自身にもあんまり自信がないし、そもそも何か語る重大な事もないしね。でも、僕は昨日さ、ふいに、まるで天啓か何かのように(そう。風呂につかってるアルキメデスにやってきたインスピレーションみたいに!)、何か語りたい、何かを話したいなあ、とそう思ったんだよね。だから、僕はこれから語るわけだ。そしてその中には役立つ情報は少しも……。もう、やめておこよう。では、とりあえず、今日の所はこんなものにしておこよう。では、さて、明日からはどうなるか。乞うご期待という事で。……。実は僕も自分自身に期待しているんだよ。自分がこれから、どんな事を語るのかってね。それでは、とりあえず今日の所はこの辺りで。

1

例えばね、僕の両親は四十五歳なんだけど、そういう事になんか、意味ってあるのだろうか。……。例えば、バルザックとかフローベール(僕はそんなのも少しは知っているんだ。えへん。)だったら、あるいはディケンズのクソツタレなら、そういう事も少しは書いたかもしれないけどさ。ああいう、自然主義作家っていうのかな?。例えば、ビクトル・ユーゴーみたいなさ。そういう作家っていうのは、僕に言わせれば、象徴主義なんだと思うよ。いや、マジにさ。僕はね、そう思うんだよ。つまりさ、僕が言いたいのは次のような事なんだ。例えば、そういう作家の一人が、ある一つの部屋を丁寧に描写するとする。あるいは、一人の人間の生い立ちとか、あるいはその顔のでこぼこ、その細かな皺や眼光の鋭さなんかについて、細々と描写するとする。で、今もそういう作家っていうのはいるんだろうけどさ、で、その時にそういう作家が考えている事っていうのは、つまりこういう事なんじゃないかと思うんだ。つまり、彼らはそういう具体的なものを描く事によって、そこから逆にたどって行って、その人なり、あるいはその物なりの個性とか、独自性とか、あるいは魂とか心とかね……。とにかく、そういうものを描く事ができる。僕はね、そんな風に思うんだよ。つまりね、もう少し説明すると、それは画家がやっているのと同じ手段になわけよ。例えば、ある具体的な皺とか、黒目の大きさとか鼻の曲がり具合とかさ、そういうものを細かく描けば描くほどに、その人の心とか魂とかが現れてくる。そして、作家も当然、昔はそういう事をやったわけだ。僕が『象徴主義』って言っているのは正に、そういう事なんだよ。君にも少しはわかってもらえただろうか?。

……。で、今、問題になっているのは僕の両親の年齢なんだけど(正確に言えば父の方はもう四十六になったけど)、そういうものを僕が精密にここで語ってみせる事は意味があるのかな、って

僕は思うんだよ。僕はさ。そういう事を語る事に、本当に意味があるのだろうか。もちろんね、僕は高校二年生で、普通の奴——ごく普通の人間でさ、僕にも当然、具体的な人間像みたいなものは存在するんだよ。例えば、僕の髪型はいつも額が見えないくらい前髪が伸びてて、髪はさらさらのストレートである、とかさ。それが天然パーマだと、また、印象は変わってくるのかもしれない。あるいは僕の目つきとか、それこそ、どの病院で生まれて、父方の祖父は代々、優秀な家具職人であった、とかね。(実際、そんな事ははないけれど。)まあ、そういう色々な事があるじゃないか?。・・・でもね、今の僕はそういう事を話す気には全然なれないんだよ。そう、少しもね。・・・まあ、必要ができれば少しは喋るだろうけどさ。でもね、そういう事は僕は本質的にはどうでもいいと思うんだよね。だってさ・・・『個別性』が聞いて呆れるじゃないか?。今の世の中、さ。個別性、具体性。そんなものどこにある?。なあ、僕の容姿や成績や生い立ちを一から十まで描いた所で、君は僕という人間について、何一つ確かな知識を得る事はできない。だって、僕のそういうもろもろの情報もう、『一般的高校生』というデータベースになって、もう既に僕らの中に構築されているわけだからね。本当さ。それは、嘘じゃない。もちろん、僕が過去に後ろ暗い殺人を犯していた特異な高校生だったら話は別だよ。僕がごく普通の高校生に見せかけた、実は裏で大量殺人を犯しているシリアルキラーだったらさ、そしたら、今言っているような事には当てはまらないし、多分、僕の容姿の中にも人殺しっぽい所がある所をさ、どこかにいる、僕を『描いているはずの』、その天空にいる作家は、そんな風に描かなきゃならないだろうけどさ、でも、実際はそうじゃないじゃないか?。だから、僕はとにかく普通の高校生なんだよね。本当に。だからもう、僕の全ては一般化されているわけ。だから、僕は僕について、何かそういう具体的な事を語る気は全然ないんだよ。・・・こういう事って、あのホールデン・コールフィールド君も言ってたよね?。その冒頭でさ。で、彼は兄のDBだかDCだかから語り始めるんだけど、ホールデン君にとって実際、兄のDBだかDCだかなんて、どうでもいいんだよ。それは『ライ麦』を読んでいてもすぐわかると思うよ。ホールデン君はあくまでも何かを語りたいたのであって、自分の兄とか、あるいは寄宿舍での学友の行状とか、そんなものは基本的にどうでもいいんだよ。彼にとっては。でも、彼は何か語らなくちゃいけない、そして語る材料が必要なもんだから、手近にあるものをどんどん引っ張り寄せてくる。それで、その中には、ガールフレンドとのデートやら売春婦とその連れの男の粗暴な振る舞いやら、またはバーでの女とのちょっとした会話やら何やらがでてくるんだけど、でも、基本的にホールデン君にとってそれは全部、どうでもいいんだよ。だからこそ、ホールデン君は自分のガールフレンドに「このスカスカ女が」なんて言ってしまうんだ。それはホールデン君の方から見れば、ごく正当なその苛立ちが思わず間違っ出てしまったものなんだけど、でもこのガールフレンドからすればとても心外な事なんだ。・・・でも、どちらが正しいかと言われれば、それはガールフレンドの方。それは、僕も認める。

ところで、これまででも、僕は意外に沢山の事をこんな風にべらべら喋ってきたわけだけど、その中には、僕に関する情報が驚くほど少ないね。自分で読み返して、ちょっとびっくりしたよ。ひどいもんだな。全く。それに、ここまで全く、お話が動き出してない。僕は靴を履いてもいなければ、学校に行ってもいないし、女の子と一悶着起こしたり、教師に反抗したり、友達と

万引きしたり・・・そんな何もかもを一切、やっていない。僕はね、日本文学というやつが好きじゃなくてね。本当にさ。あれ、どうしてあんなに陰気なのかね?。私小説とか何とか言うけど、何か、それ以前のような気がするんだよね。嘘臭い、というかさ。何というか、今になってそんな悲劇とか喜劇とかが本当にあるだろうか?、って。そういうの読んでも、何というか、作者が皆おんなじ顔に見えてくるんだよ。でさ、確かに取材とかして、ちゃんと書いてるのかもしれないけど、全般的に嘘くさくてね。要するに、そんなものもう無いのに捏造している、っていうさ。例えば、短歌とか俳句を作っている人が、もうこの世界はそのほとんどが機械化されて、その上映像化されちゃっているのに、その現実から目を逸らして未だに『歳時記』くって短歌や俳句作ってる、みたいなね。もちろん、僕は短歌や俳句に関しちゃう無知もいいところなだけでさ、でも、その嘘くささっていうのはどうやら本当のような気がしているんだ。今の時代から逃れる事はできない、ってね。でも、逃れられている振りはできるさ。あくまで、『振り』だけだよね。

まあ、そんな事はどうでもいいんだけどさ。本当に、どうでもいい事ばかりさ。この間、うちの担任の田口っていうのがさ、説教してきて、「お前達ももう二年生だ。今の内から、再来年の受験を見越して勉強始めなくちゃいけないぞ。先生はなあ・・・」なんて喋りはじめてさ。全く、もううんざりだったよ。僕は田口がごちゃごちゃ言っているHRの時間、ずっと窓の外を見ていたよ。幸いにも、僕の席は窓の近くでね。ここは、確かに教室では最高の場所の一つなんだよ。本当に。授業が退屈なら、(退屈でない授業なんてないけど)窓の外を見て気を晴らす事ができる。ほら、学生物のライトノベルなんかだと、よく主人公のいけすかない男子高生が座っている場所だよ。で、大抵、そういうライトノベルだと、その前か後ろに幼なじみとか、あるいは銀髪の美人の転校生が座っていたりする、そういう場所だよ。そうさ。僕にとっては、場所だけは最高だけど、僕にはもちろん、そんな幼なじみも、銀髪の『ツンデレ』の転校生もない。だから、僕は授業中、一人でただ窓の外を見ているだけだ。そして、窓の外じゃあ、大抵、一年生やら三年生が運動場をパタパタ走ったりしていてね。僕はそういう生徒達を、上から俯瞰で見ているんだな。授業の間。もちろん、教科書を立てて、さも勉強している振りをしながら、横見して外を見ているんだけど。その程度の事なんだけどさ。だけど、あんまり怒らない先生の場合には、ずっと、堂々と窓の外を見ているさ。そしてね、僕はそのたびに思うんだよ。ああ、こんな狭苦しい、学校なんていう檻を出て行きたいな、って。でも、檻を出てもロクな事はないって僕は知っている。僕はカントも少しばかりかじっていてね。カントの『真空の鳩』という小話があるけど、正に、その鳩が僕なんだよ。多分、この世の中には、純粋な自由なんてないんだ。あるのは、ただ窓の外に対する、ティーン・エイジャーの憧憬だけ。そして、実際窓の外に出てみたら、それはそれでうんざりするっていう、そういう事なんだよ。きっと、真実っていうのは、そんな風に味気ないものなんだ。・・・きっと。

ふっ。僕は本当に、自分が何を言っているか、わからないね。いや、本当に分からないんだ。僕は自分が何を言い出すのか、自分でもよくわかっていない。でもさ、僕は友達の間では(僕にも友達がいるんだ!。驚いたかい?。)、良識的な人間なんだぜ。いや、本当に。そりゃあさ、ホールデン・コールフィールド流に、急に突飛な事をしたくなる、そんな気持ちも分かるよ。例えばさ

、僕は昔から、人が『絶対にやってはいけない』っていう事は、やってみたい気持ちになる、そういう子供だったんだ。それは例えば、ビルの最上階から飛び降りるとか、あるいは高速道路を走っている車のドアをバツと開けて、そしてその誘拐犯の車から危険を承知で逃げ去る、みたいなね。要するに、テレビとかアニメとかの影響なんだろうけど、僕はそういう事を夢想するのが好きなんだ。でも、だからといって、僕が犯罪者気質とまでは言えないと僕は思うけれどね。・・・おっと、それはあまりにも早とちりじゃないか？。ジェイムズ警部。・・・ジェイムズ警部って誰だって？。いや、今僕が適当にでっちあげた無能な警部だよ。そいつは、探偵の謎解きにてんでついていけやしない、そんな不器用な警部なのさ。探偵小説の中にはよくいる、無能だけど性格のいい、そんな警部の典型みたいな奴の事だよ。ジェイムズ警部はさ。

さて、それではくだらない事はこれぐらいにして、僕も学校へ行こうか？。学校へ。これがまた、僕の通っている高校は、ただの平凡な公立高校でね。僕のクラスは廊下の端っこのほうにある、七組なんだけど。で、その高校の名前っていうのは、日吉西公立高等学校っていう長ったらしい名前なんだよ。それで、この日吉西公立高校というのとは別に、日吉北公立高校っていうのと、日吉南公立高校っていうのがあってね。あほらしいんだけどさ。一体、誰がこんな抜群にセンス溢れる名前をつけたんだろうか？。いや、多分、その名前つけたお偉いさんは、時間がなかったんだと思うよ。その時。それで、西、北、南、とポンポンとつけてって、それで、満足したんだろうね。「ふうむ。わしのネーミングセンスはなかなかのものじゃ。どうじゃ、島岡」なんて、部下の島岡に聞いてね。で、島岡は、「さようでございます」なんてね。でも、島岡の頭の中にあるのは、去年からやっている横領がどうやったら見つからずに済むか、っていうその方策についてなのさ。まあ、馬鹿話はこれぐらいにしてさ・・・。

まあ、とにかく、僕の通っている高校っていうのは、そういう風に、ごく平凡な公立高校なのさ。それで、もしこの日吉西高校を、越前北高校に変えても、鳴海下高校に変えても、何一つ変わらないしさ。要するに、何を変えても何にも変わらないし、そこには、平凡な公立高校の平凡さ故のバカらしさがあるんだよ。例えば、僕のいるクラス——七組の人物情景とか、その人間心理を、僕が今、バルザック並に描写してみようか？。君のために？。・・・きっと、くだらないと思うよ。僕ねえ、そういうのが嫌いなんだよ。だって、大体あれでしょ。ほら、すぐ援交する女子高生みたいなのが出てきてさ、それで急に会話をおっぱじめるわけよ。その作品の冒頭でさ。

「ねえ、リカ。今日、マスカラ貸してよ。ちょっとうちに置いてきてさ」

「えー。自分のつかいなよ」

で、そこに三人目の女子が入ってきて、

「ねえねえ、リカ、アン。昨日の坂上君のソロライブ見た？」

そしてそれにアンが

「えー。あたし、坂上君のファンじゃないし。あたし、望月君のファンだし」

って言って、それに対してその三人目の女子が

「何よ。あんた前は坂上君かっこいいって言ってたじゃん」

みたいな、さ。そういう会話。くだらないんだよ。僕も、聞いた事があるよ。うちのクラスの

女子がそういう会話してるの。で、男の方はサッカーと野球とF1とAVの話題で盛り上がっててさ。くだらないんだよね。実際さあ。そんなものさあ、僕は現実でもう知ってるんだよ。そういう会話って、もう散々聞いたんだし、今更、作家だのアニメーターなどに、そんなものをだらだらと描写してほしいんだよ。うざったいんだよ。いや、前にうちの女子が、「あたしこの前、コンドームつけずに生でやったんだけど・・・」みたいな話始めて、そしたらその話し相手が、「ちょっと、声おおきいよ」みたいな事言って、それでそのコンドーム発言の女子は、「いいって、いいって。別に、気にするもんじゃないよ。で、さあ・・・」みたいな会話しててさ。それで、僕も男子のはしくれだからさ、そんな会話が風に流れて耳に入ってきて、興奮しちゃったんだよね。興奮しないわけがないよね？。で、僕は、勃起を抑える事ができなくなってね。下半身は、正直だね。でも、それと共に、くだんねえなあ、っていう気持ちもあるしね。大体、そんな会話してる連中なんて、頭空っぽなんだし、もう、どうでもいいんだよ。だから、僕も思うんだよ。何もかもどうでもいいからさ、その股ゆるそうな女の子に積極的に近づいて、それで一発やらせてもらえば、それでいいんだって。そうさ、そんな風に生きるのが、この世界の正義であり、また掟であり、勝利だって事を僕はよく知っている。そして実際、そうやってうまい事やってる男子を知ってる。でも、だからどうだっていうんだ？。ほんとにさ。だから、何なんだよ？。僕は思うんだけどさ、人間っていうの結局、夢を食って生きている生き物なんだよ。セックスだの何だの、金があるだの無いだのさ、でも、実際の、現実のセックスとか、金で買った何か、その効用とかさ、そんなの関係なくて、結局、全てはそういうものに付随している夢なんだよね。欲しいのは。皆が欲しがっているのは。皆が欲しがっているのは女でもなく、男でもなくも、金でもなくさ、『金を持っている』という優越感とか、あるいは『可愛い彼女がいる』という至福感。あるいは、自分は『千人の女と寝た』とかね。知ったこっちゃないんだよ。お前が何人と寝ようが、あんたがどんな有名人のイケメンに抱かれたかとか、こっちは興味ねえんだよ。知らないんだよ。大体、そんな事、君らにも興味ないだろうが？。結局、皆は夢を見たがっているわけだ。僕はね、そう思うんだよ。愛だの何だの、金だの何だのと、もうなんにもないんだよ。実際の話。僕はまだ童貞だけどさ、でも、別に構わないね。構わない、というより、どうでもいいね。いや、僕も人並みに彼女が欲しいわけだけども、でも、誕生日にディズニーランドに行く事になったり、彼女の友達の子と根のない話をしなくちゃいけなかったりさあ・・・。そういうのって、考えるだけでうんざりしてしまう。だから、僕はもう、どうでもいいや、って気分になってしまうんだよ。全く。だから、僕には未だに彼女ができないんだな。全く、困ったもんだよ。僕も、人並みにうまくやればいいんだと思うよ。もちろん、そうさ。でも、そうはいかないんだよな。どうしてだか知らないけど。僕は天邪鬼なもんでね。天邪鬼というのは、全く困った性格だよ。だって、皆が一様に幸福目指している時は、その逆に不幸を目指すさなきゃいけないんだから。これでもね、天邪鬼という性格は、本人にとってはなかなか辛い所があるんだよ。ほんとうさ。

でも例えば、こういう話はどうかな?。この話は君の気に入るだろうか?。例えばさ、僕の横のクラスの六組にはさ、ものすごいデブで、しかも顔がニキビだらけの、皆から気持ち悪がられている奴がいてさ。木村、って言うんだけど。で、その木村っていうのは六組でも、何か病原菌持った野良犬みたいに嫌われているんだけどさ。で、その木村っていうのを始めて見た時、僕もすごく嫌悪感を感じてね。廊下ですれ違った時にね。そいつは目つきも悪かったし、大体、気持ち悪いんだよな。もちろんね、木村みたいな奴がいじめられていてかわいそうだって見方はあると思う。でも、実際には木村はいじめられているというより、ただ嫌厭されているだけなんだな。誰も、積極的にかまいたがらない感じ。でさ、そいつが容姿が悪くて、それで性格が良い奴だったらさ、それはもちろん悲劇だよ。もしそうだったら、それは誰も言い訳ができないし、それに悪いのは嫌っている僕らとか、あるいは六組の連中なんて事になる。けどさ、実際には、その木村っていうのはどうやら本当に性格の悪い奴で、あくまでも噂だけど、人の物を取ったり、中学の時に後輩をいじめてたりよくしてたっていうそういう話もある奴なんだよ。で、僕も廊下でその噂の木村にあった時に、『ああ、こりゃあ』って納得しちゃったんだよな。なんというか、その木村っていうのは本能的に嫌悪感をそそる奴で、で、僕がそいつを見た時に直観した印象によると、そういう奴っていうのは何というか、世界中を常に薄目で見て、そしていつもそこから何かをくすねとろうとしている、そんな風な奴なんだよな。あくまでも、見た目から受けた直観だけどさ。まあ、僕もおかげさまで高校二年生なもんで、世の中には色々な奴がいるって事がわかりはじめてきた年でもある。そして、世の中には邪悪な奴がいるって事も分かっている。で、その木村っていうのは、その『邪悪』に該当する・・・なんというか、そんな気がしたんだよ。そいつに会った時にね。で、そういう奴っていうのは嫉妬とルサンチマンの塊でね、それでいつもこの世界に対して恨みを抱いていると共に、いつもそこから自分の為の利益を引き出そうと考えている、そういうタイプの人間なんだよ。いつも、誰かをいためつけたがっていて、そしてそのいためつけるという行為は、一種の気晴らしでもあるし、また、それが自分自身に対する慰めなんだよな。同時に。そういう奴っていうのは、最初から自分がどうしようもない奴っていう事がわかっていて、そして次にこう思うんだ。「俺はどうしようもない奴だ。だから、何をやってもいいんだ」。あるいは、こんな風に思う。「俺が間違っただけの事は、俺の親のせいだ。回りのせいだ。兄貴のせいだ。担任のせいだ。そうだ、俺は悪くない。俺には、間違っただけの『理由』があるんだ」。なんというか、そういう邪悪な連中っていうのは、そういう風に考えるんだよな。いつの時代でも。で、自分を正当化する為の理由はいつも、千何個と大量に持っているんだけど、自分を押しえつける為の理性は一つも持っていないという状態なんだよ。全く、それがそういう系統の奴の特徴なんだよな。・・・全く。

ま、木村が実際、僕の言った通りの人物かどうかは知らないけどね。でも、あの雰囲気と、そして、木村にまつわる話からすると、僕はとても嫌な気がする。でも、もし、僕の方で木村に同情するとすると、あいつがそうなったのは本当に回りのせいかもしれない、と考える事もできる。例えば、女子でも、どっちかっていうと、不細工な方が性格が悪い奴が多いし、可愛い子の方

が性格が良い子が多い気がする。もちろん、それには例外もあるけどさ、あくまでも、僕の自分勝手な統計学的に考えて、ってことだよ。つまり、そこはパーセンテージの問題だ。あくまで、ね。

で、不細工な女子の方が性格が悪いっていうその理由は、次の二通り考えられると思うんだ。一つは、その不細工な女子が、ずっと長い間回りから『不細工』だという、そういう扱いを受けた為に性格がねじ曲がってしまったという例。そしてもう一つは、そいつは本当に根っから性格が悪くて、そしてその性格の悪さがその顔に如実に現れた為に、そいつが不細工に見えるという例。僕は、そういう二つの理由が考えられると思っている。そして、一人の不細工な女子(僕も随分口が悪いな)を見てみると、実際の所、その二つの理由がないまぜになっていて、どちらとは決めきれないんだよな。前者なら同情の余地があるし、後者ならないし。でも、実際にはその二つがないまぜになっているように見える。だから、僕としては、どういう態度を取ればいいのか、わからないんだよ。蔑めばいいのか、同情すればいいのか————。でもね、僕はよく知っているつもりだ。蔑むのも同情するのも、実際的には間違っただけ接し方であるというのが。だから、これはあくまでも理論上の、机上の話なんだけどさ。

で、木村の場合に戻ると、奴はどっちなんだろうな、って。木村からすれば、自分がこんな風になったのは周りのせいだって言うだろうし、周りからすれば、お前がそんなんだから、自分達はこういう態度をしているんだ、って言うだろうし。そして、そのどちらにも部分的な真実はある。で、僕はそういう事を考えると、眠れなくなっちゃったりするんだ。もちろん、僕もそうやって人の事を不細工だの美人だの気持ち悪いだの、色々言っているけど、別に僕も品行方正の美しい優等生でもなけりゃ、ものすごく太っている奴とか、顔がニキビだらけとか、若禿げとか、そういのもないし。僕はどっちでもなくて、ごく普通の、当たり前、それこそ『無』のような奴で、アニメとかだと大抵背景に同化してしまうような奴なんだけどさ。でも、僕もそういう事を考えると、よくわからなくなるんだよ。例えば、僕がものすごい醜い容姿で生まれたら、親はともかくとして、周りの人間は僕を嫌うだろうし、で、そうなったら僕も皆を嫌うだろうし。で、僕は最後にテロみたいな事して、最後に誰か三人くらい適当に人を殺して、そしてこの世の中への恨みつらみを吐き出してから死ぬかもしれない。そして、僕はそういう自分、そういう事をする自分というのを否定する、確固たる理由とか原理みたいなものを今だに、見つける事はできていないんだよ。気持ち悪い奴を愛してあげろ、と言う事もできないし、人から否定されても、それでも人を愛せなんて————それは偽善だし。だから、僕はもうどうすればいいかわからないんだよ。でも、例えば、木村対して感じる本能的な嫌悪感なんてのは、割と正しいような気もしているし。もっと言うと、先に僕は美人は性格が良い割合が多いなんて事言ったけど、僕は、同じ学年で本能的に嫌悪感を感じた美人の女子というのを知っている。それは、僕がある昼休みに図書室で偶然会った子でね。僕はその子のクラスも名前も未だに知らないだけどさ。僕はその時、ただ昼休みにぼうっと一人で図書室に行っていたんだよね。で、何かそこらの科学雑誌とか、あるいは何かそれっぽい、面白そうな小説でも借りてこようかと思っていて、そして棚の周りをうろうろとしていた。その時、僕はぼんやりと何か考え事をしていてね。僕ってば、いっつもぼうっと考え事ばかりしているもんで、それで大抵目の前がよく見えなくなっている

という事がよくあるんだよ。『夢遊病野郎』って、七組の奴らにからかわれたりする事もあ
るな。・・・時々だけど。で、まあ、僕はそんな状態で図書室をうろうろしてたんだけど、急に
その子が、棚の影からさっと現れてさ。角だったから、急だったんだよ。で、僕はその子を見
た時、ああ美人だなあって思った。その子は髪が栗色で(染めてはいないと思う)、それで目がくり
くりしていてね。可愛かったよ。でも、僕がそのほんの一瞬で、凄い違和感というか、とても気
になったのは、その子のメイクがわりときつかったっていう事。うちは軽い化粧くらいなら、別
にOKなんだよ。そんなに厳しい学校じゃないしね。でも、その子はさ、割とこうきつめのメ
イクでさ、で、もっと大切な事は、何というか、表情がないんだよな。表情がさ。それが、化粧の
下に表情が隠れているというよりは、何というか、分厚い仮面をかぶっているというかさ。何か
、そういう感じがしたんだよ。でも、それはそのほんの一瞬の判断だからさ、そう細かい事は言
えないんだけど。で、急に目の前に現れたその子は僕を見て、何というか、「ふん！」という感
じで、僕に当たりそうになりながら、僕の横をすり抜けていった。・・・恥ずかしい話なんだけ
れど、その時、どちらかが道を譲らなければ、どっちも通れない状態だったんだよ。で、その
子が直進してきたもんで、僕は思わず道を開けちゃったんだよ。恥ずかしい話。で、僕はそ
の時、その女の子と目が合ったんだけどさ、その時に僕が感じた事っていうのはつまり、こうい
う事だったんだよ。(あ、この子は、『僕』だからこういう態度を取ったんだな)っていう。僕はそ
の時にそう思ったんだ。そう、つまりその子は、おそらく、もし僕がピカピカに磨いた十円硬貨
みたいにキラキラしたイケメンだったらさ、多分、僕に軽く会釈して微笑みを浮かべなから、そ
っと僕に道を譲ったんじゃないか、っていう事。・・・そういう、人によって態度を変える奴っ
てたまにいるけどさ、ああいうのって浅はかな人生戦略だな、なんて僕はいつも思うんだけどな
。誰か社会学者の先生辺りが、そういう、その場しのぎの人生の生き方じゃうまくいかねえぜ、
って事、証明してくれたらいいんだけど。・・・まあ、そんな事はどうでもいいや。

で、まあ、その時、僕はそんな風を感じたんだよ。その子は実際、美人だったんだけれどね。
でもまあ、そういうかなり早いうちから、自分の人生戦略決めてるっていうのは大したものだ
と言えるかもしれない。大体、僕相手にそういう態度を取るって事は、あながち間違ってもい
ないだろうからね。そりゃあ、僕だって腹は立つけどさ、でもまあ、僕はそういう子がこの先にモ
デルやらアイドルやらになって、それで人気が出たとしても、少しも驚かないね。だって、そ
ういう世界は全部が嘘で構成されているから、うまい嘘をついたもの勝ちなんだよ。だから、化粧
も濃くして、自分の内面を見られないように気を配るわけだ。そして後は、ロボットのように、
それっぽい言動をしていればいい。何せ、今はロボットみたいなタレントやモデルが人気が出る
時代だからね。だって、皆ロボットになりたがってるんだろう？。そうじゃないか。

僕はね、もう、自分でも何を言っているのか、わからなくなってきたな。アハハ。最初は木村
の話をしていたんだけど、その内に何がなんだか、良くわからなくなってきたな。僕って
いう奴は本当に、自分が何者で、それで何をして、どうやって生きているのか、またどうやって
生きたいのか、そういう事が自分でも全然わからないんだよ。困った事に。・・・そういやさ、
この前、この先に就きたい職業アンケートが回ってきて、途方にくれちゃったよ。うちの担任教
師がいつもの面倒くさい調子で、「はい、これ、十分後に回収するから」って言いながらそのザ

ラ紙を配ってさ。それには、将来就きたい職業を書き込む欄が第一から第三まであってさ。で、何か書かなくちゃいけないんだけど、僕は何を書けばいいのかわからなくて、ほんとに困ったんだよ。だって、一体何を書けばいいんだい?。「サラリーマン」とでも書けばいいのかな?。それとも、第一希望が「保険・営業」で、第二希望が「板金工」で、第三希望が「飲食・店長」とか?。えらく現実的な希望だね、それも。・・・で、僕は迷った挙句に、次のように書いたんだよ。「第一希望・詩人」「第二希望・批評家」「第三希望・小説家」。そして、その欄外に、僕はこれを読んだ先生にもきちんとわかるように、ちゃんとその希望理由を書いておいた。偉いだろう?。えへん。そこには僕はこう書いたんだ。

「僕の拙い記憶に寄ると、故・萩原朔太郎先生は確か、次のように語っていたように思います。『詩第一、批評第二、小説第三』。(要するに、詩が一番偉く、その次に偉いのが批評、そしてその次が小説という事です。)私めもまた、萩原先生のこの哲学にならって、以上のような希望を表明した次第であります」

・・・いや、僕も書いている途中に、ああ、僕、アホな事書いているなあ、と思ったんだよ。これでまた担任に、『変な奴』ってレツテルを上書きされちゃうのかなあ、って。でもさ、時間がたった十分しかなかったから、そのまま書いて出しちゃったんだよ。いやあ、後悔しているよ、僕も。くだらない事、書いちゃってね。でもま、若気の至りだよ。若気の至り。そう、あの赤い仮面つけた奴みたいにね。そう、あんな感じの『若さ故の過ち』なんだよ。なんたって、僕もまだ若いしね。十六。そう、僕はまだ十六才だ。花も恥じらう十六才、ってね。・・・ああ、くだらねえ。最近、僕はやっとスマートフォンにしてもらったんだよ。親が許可してくれてね。これで、僕も皆のグループと通信できる・・・なんて、そんな事する友達ろくにいないんだけど。・・・いや、したくないんだな。どうでもいいさ。僕は、十六才。もうほんと、青春なんだよね。青春。・・・ああ、くだらねえ。地獄に、墮ちろ。

くだらない?。何が、くだらないだって?。僕の話?。・・・そりゃ、まあ、それなら認めるけどさ。

例えば、こんな風に学校行く間、僕は色々な事を考えてきたんだよな。過去を振り返ればさ。小学生の頃から、そうだった。小学校の頃は集団登校だったから、あんまり一人で道草なんて食えなかった。でも、僕はその集団の中にいて、そしてふいに目をそらして、そいで田んぼの辺りに生えているシロツメクサの塊なんかを見て、そうして、あのふわふわした白い部分を触ってみたいな、なんて思ったもんだ。今の僕は、十六才の僕は、あの頃のガキだった僕とは違う。でも、考える事なんて、そんな変わらない。くだらないんだよ、何もかも、さ。

例えば、学校。僕はこの学校という奴にあしかけ十年ほど通っているわけだけどさ、その中で何をしたかって言うと、何にもしていないわけ。ほんとにね。もちろん僕もね、皆と同じように部活もしたし、恋もしたし、喧嘩もしたし、それから教師に楯突いたり、不良にカツアゲされて小銭を渡して、その後、ツバ吐いて、少しでも自分をタフに見せようとした事もあったんだけどさ、でも、そんな何かもかもがもはや、走馬灯のように過ぎていく・・・。要するにね、僕はもう老人なんだよ。なんだか、僕は最近、そんな気がしているのさ。僕は、十六才の老人なんだよ。そうさ。僕はもう全部を既に見ちゃったような気がしているんだ。だから、『永劫回帰』という奴だね。くだらないけど。ニーチェ大先生だって気が狂っちゃったし。あの人の哲学の中には、『自分がこの先、気が狂う』というの、その哲学の中にファクターとして入っていたのかな?。ちっとばかり、僕は気になるね。もし、それがあの人の哲学の中に入っていたとしたら、それは大したもんだし、もしそうじゃなくても・・・それでも、まあ大したもんだね。あの人はさ。

まあ、僕っていうのはそんなもんなんだよね。今は五月で、衣替えはまだ先なんだけどさ。僕は、覚えているんだよ。始めて、僕の前の子がブラジャーしてきた日の事をね。あれは、中学二年生だったかな。その子は、別にすごくかわいいとか、気になる子だったとか、そういう事も全然なかったんだけどさ。でも、ある暑い日――歴史の授業だったかな――に、ふと前を見ると、その子のブラジャーの紐がシャツ越しに透けて見えるわけ。僕は、うわっと思ってね。その時、僕は思わず消しゴムを落としちゃって、そしてそれが隣の、またその隣の席まで転がっていったね。僕はすぐ立ち上がって、その消しゴムを拾ったんだけど、でも、僕の心は動揺してたね。『おい、ブラじゃん・・・』。馬鹿な男子だよな。ま、男なんて、そんなもんさ。もし君が女なら、男に首紐つけて、そいつを操作するのなんて簡単な事さ。コツさえ掴めばいいんだよ。コツさえ、ね。男のくだらない夢や自慢話を聞いてやれば、その代わり、その男は君に欲しがってたブレスレットの一つでも買ってくれるかもしれない。まあ、それはいいんだけどさ。

まあ一、でも、その時の僕は鼻血が出るかと思ったね。いや、冗談じゃなく。僕はね、ウブなんだよ。ウブ。嘘だと思われるかもしれないけどさ。なんていうか、僕はあらゆる事を先に頭の中で済ませちゃうタイプなんだと思うよ。そうさ。僕はね、例えば、色々な物事やドラマやストーリーや何やかんやを先にもう、頭の中で何十周とシミュレートしてしまった奴なんだ。だから

、現実にもそういう事に出会うと、僕は途端にまごついてしまう。何というか、考え過ぎるのも、問題なんだよね。思考と現実のギャップというか、さ。でも、考えない事には叡智はないから、そうなるも猿に逆戻りしてしまう。例えばさ、セックスなんて事例も、考えればこれは大変な大きな出来事なんだけど、でも考えなければただ腰を振るだけのくだらない行為に見える。でも、ただくだらないからって、君が誰かにすぐ体を預けたり、逆に君が誰彼誘ってやりまくったりしたらさ、何というか、そういうのは臭いとなってその人に残るんだ。僕の言っている事、わかるだろうか？。要するに、何でもないと思ったら何かあるし、何かあると考えすぎると何にもできなくなっちゃうし……。僕はもちろん、後者の方なんだけどさ、そうやって考え過ぎちゃったせいで、僕はもうなんにもやる気がなくなっちゃったんだよ。本当に。昔、ポルトガルにペソアっていう詩人がいてさ。で、そいつはずっと孤独な(孤独を望んだ)野郎だったわけだけど、そいつが、『現実生きるより、夢見ている方が素敵だ』みたいな事言っているんだよね。で、僕もペソアの気持ちがわかるわけさ。で、特に大切な事は、ペソアっていう人が終始サラリーマンみたいな生活送ってた人だっていう事なんだ。つまり、そのペソアという人は傍から見たら凡人中の凡人なんだけど、その内側には詩的な宇宙が広がってたんだな。で、そのギャップが、この僕と少し似てるな、ってそう思ったりもするんだ。もちろん、ポルトガルの国民詩人に自分を擬しているから、うぬぼれているとかいないとか、そういう事じゃなくてさ。あくまでも感受性の質が、って事だよ。あくまでも。

だから、僕も夢を見るのは得意なんだけど、現実生きるのは苦手なんだ。でも、時々、どっからが夢で、どっからが現実なのか、分からなくなる時がある。白昼夢というか、ゲームの世界に入り込んでしまった現実世界の住人というか……。例えば、僕は、うちのクラスの安達とか、秋川とかとくだらない事しゃべっててさ(新作ゲームの事とか)、そしてその内にふと、なんというか、急に自分がこの宇宙の端っこに取り残されているような感じに陥る時があるんだ。……そういう日って大抵、陽が出ていていい天気だね、それでカーテンに強烈な日光があたったりするんだけどさ。で、そういう時、僕は急に世界が真っ暗か、あるいは真っ白になったように感じられて、それで皆の喋っている事が急にどこか見知らぬ国の外国語のように聞こえてくるんだよ。本当に。で、僕はその時ふいに、この宇宙の外に追いやられてしまうんだな。マジで。安達と秋川は相変わらずゲームの話してる。で、僕もそのゲームの話はわかるんだよ。そのゲーム、持ってるしね。でも、そういう安達とか秋川の会話、いやそれにもまして、この教室、この学校、そしてこの世界の意味自体が急に僕には曖昧であやふやで、さっぱりわけのわからないものになってしまうんだ。君はそういう感覚に陥った事はないだろうか？。僕は、わからなくなったんだよ。で、そうやって僕は真っ白な宇宙に放り出されて……。でも、秋川の一言で僕は現実に返ってくる。

「桐野、お前あそこどうやってクリアした？」

その一言で、僕は現実に返ってきた。「ああ、あそこ。あそこね……。あそこは『槍』が鉄板だぜ」みたいな。実際にはクリアしてなくても、ネットで見た情報で適当言ってお茶を濁したりしてね。そんな事しなくてもいいはずだけど。でもまあ、僕はそうやって現実に返ってきた。不思議なんだよ。自分の、あるいはこの世界の意味が分からなくなるという事が。僕はね、こうい

う事を形而上的に意味付けして欲しくないんだ。例えば、サルトルの『嘔吐』みたいな、ね。ただ、吐いただけじゃねえか。僕、サルトルが嫌いなんだよ。天才なのかもしれないけどさ。で、その教室での僕の感覚っていうのは正しく『感覚』なんだから、これを変に理解してもらいたくないんだ。僕は。これはあくまで、僕のパーソナルな感覚だ。だから僕はこの感覚を死ぬまで手放す気はないのさ。本当に。

でも、夢を見るって事は奇妙だな。僕はそう思うね。断然、そうさ。君は夜寝る時、どんな夢を見る？。実は僕は最近、悪夢ばかり見るんだよ。親父がさ、鎌を持って追ってくるんだよ。『お前、進路はどうなってんだ～』って。いやあ、怖くてね。本当に、怖いんだよ。うちの親父は切れると怖いからね。マジで。君は知らないから、そんな風に笑ってられるんだよ。君だって、桐野家の一員になったら笑ってられねえぜ。本当に。で、親父は鎌持って僕を追ってくるんだけどさ。それで、僕は逃げるんだけど、その逃げる場所はいつもマチマチでね。汚い下町風の市街地の事もあるし、あるいは砂漠とか、川の土手とか、色々あるんだよ。で、親父の後ろに母さんと妹と一緒に走ってくる時もあるってね。僕は僕以外の家族三人に追われるんだよ。全く、やりきれないよな。でも、その時の、僕の後ろめたい気持ちとか、その罪悪感っていうのは真実でね。そう、僕はその罪悪感っていうのは本物のような気がしているんだよ。ほんとに。フロイトがどうとかは関係なく。だから、僕は逃げるわけだけさ。で、そうやって必死に逃げてたら、その内に親父も母さんも妹も消えてるんだよ。それで、ふいにオアシスの縁のような場所に来ている。で、そのオアシスの水で、髪を洗っている女がいるんだよ。貞子みたいに長い髪しててね。で、僕は物凄く嫌な予感がするんだけど、何故かそうしなきゃいけないと思って、それでその女に声をかけるんだよ。『大丈夫ですか？』みたいにね。そしたら、その女は物凄く、物凄くゆっくりとこっちに振り向くんだけど、それが怖くてね。僕はもうその時には後悔しているんだよ。しまったな、って。で、その女が振り向く。そしたら、その顔は・・・うちの親父なんだな。鬼そっくりの鬼気迫る表情に変わった、うちの親父なんだよ。いやあ、君は笑うけど、本当に夢見てる方は怖いんだぜ。凄く、怖い。そして、僕はそこで意識失って、現実に戻ってくる。そして、こっちの現実の方にも怒った親父と眉しかめた母さんと、僕を軽蔑している妹が存在しているわけだ。やれやれ。

全く、やれやれだよ。夢ってのも奇妙だけど、現実っていうのも奇妙なものだと思うよ。だから、どっちも奇妙なんだな。でもさ、そういう夢の中の自分の罪悪感っていうのは、僕にとっては真実で、それだけが現実と夢をつなぐ、唯一の物であるような気もしているんだな。僕は。そう、そういう罪悪感っていうのは生きている時にも感じていて、そして夢の中でも感じている。人間の心を一つの檻だと考えると、その中にはいつも罪悪感という小鳥が入っている。こいつは詩的な比喻だけど、本当のような気がしているんだ。僕は。で、この小鳥を殺すのも逃すのも、あるいはこの檻から目をそむけるのも僕らの自由なんだけど、でも、その小鳥って殺したと思っててもまたすぐに舞い戻ってくるという厄介な性質のものでね。僕はね、元気ハツラツたるビジネスマンが羨ましいんだよ。あるいは、三組の武田みたいなスポーツマンとか。武田は、凄いんだぜ。インハイに出て、全国十六強にまで入ってね。何の競技でって？。何だっけ？。確か、バドミントンとか、何とか。とにかく、個人競技だよ。個人競技。でさ、そいつはうちの学校でも、

そういうイケてるスポーツマンって事で有名なんだけどさ、で、僕みたいなひねくれ野郎は、そういう奴を知ると、こう考えるんだよ。『その武田とかいう野郎、どうせ性格のねじ曲がった糞野郎に決まっている』。僕ってひねくれてるからね。それに、嫉妬心もある。それで、そんな風に思うんだな。で、クラスの女子なんかも、「武田君、かっこいいよね〜」みたいな話してて。で、僕なんかクズだから、「クソがっ」って思うけど、でも僕、武田に勝てるポイントって一つもないからね。本当に、一つもないんだよ。武田の方がハンサムだし、成績もいい。もう本当にクソがっ感じなんだよ。クソッ。でさ、僕が何かの拍子でその武田って奴を具体的に知るきっかけを得るとさ(体育の授業を三組と合同でやる、とか)、僕はそいつをよく見てやろうと思ってよく見るんだけどさ。で、それが嫌な事に、武田っていうのは性格も良い奴なんだよ。僕、見てて悲しくなってさ。もう、自分が悲しくなったんだよ。ほんとにね。どうして、そんな風に嫉妬してるかって。全く、まいっちゃってね。そしておまけに、その武田って奴はさ、僕らのランニングが終わった後、どういうわけか、僕の元に近づいてきて(全然、面識ないのにね)、それでいきなり僕にこう言ったんだよ。「君、ラストスパートかけるなら、残り半周になってからの方がいいよ」って。で、僕はぽかんとして、「あ、あ、ありがとう」みたいに口ごもって言っちゃってね。で、その武田君はすぐにどっか行っちゃった。僕はね、その時に、『ああ、僕はこいつに負けたなあ』って思ったんだよ。ああ、本当に、人として自分はその武田って野郎に負けたんだな、って。それから、僕は武田の事が好きになってね。まあ、あれから一回も喋ってないんだけど。でも、僕はあいつの事が好きだよ。気取ってないしね、それになんというか、無意識的なところがある。ああいうのって、本当に天から贈られた素質、っていうのかな。ああいう奴だと、人が良いっていう場合、本当に人が良いんだよ。裏がない、というか。でもさ、僕なんかは裏しかない人間だからね。べろんべろんなんだよ。べろんべろん。いくら裏返しても裏しかない、みたいだね。そして仕舞いに、何が表で何が裏かわからなくなってくる。なあ、君、聞いてくれよ。僕もね、普通の高校二年生になりたいんだよ。そう願望しているんだよ。でも、それはできない。それは、僕のこの、倒錯したホールデン・コールフィールド流の自意識のせいなんだ。クソッタレ。別に僕がサリンジャーを剽窃しているわけじゃないさ。ただ、たまたま僕とコールフィールドの魂の形が似ていた、それだけの事なんだ。もう何もかもがクソッタレさ。そう、感じる時もある。今のようにね。そしてそういう時には、あの武田だってこの世の中一番のクソ野郎に見える。そんなわけはないのにね。でも、一番のクソ野郎はこの僕さ。それは君が一番良く知っているだろう?。・・・おや、君は笑っていらっしゃる。アハハ、と。それは確かに、優雅な笑みだけどね、だけど人として生まれた以上、悩まなきゃいけない事もある。ねえ、僕は十六才なんだよ。十六才!。こんな辛い事があるかい?。君?。僕はね、十六才だけど、もうお爺さんなんだ。だから、そのおかげで、こんな風に、安達と秋川の会話にも一種の無情を感じなくちゃならないんだよ。・・・ああ、ほら。学校が見えてきたよ。クソッタレの学校が!。チャイムをキンコンと鳴らして。ところで、僕みたいな学生が、親戚のおじさんなんかと会うと、そういうおじさんって決まって、「学校、楽しいか?」って聞くんだよな。「楽しいわけがないだろ。バカヤロウ!」とは、僕ももちろん叫べないから、僕は「はあ、まあ」って適当にお茶を濁す。親戚のおじさんと喋る事なんて、僕にはなんにもないんだよ。ほんとに。ふう、やれやれ、もう校門が

閉じそうだよ。昔、遅刻しそうな生徒がガラガラと閉まる校門に向かって走って飛び込こんで、それでそのまま校門に挟まれて死んでしまったっていう事件があったな。やれやれ、だよ。遅刻は死より重い、ってね。さあ、僕は学校へ行くよ。そして、またクソツタレの授業の始まりだ。もちろん、一番のクソはこの僕だよ。それは誰よりも分かっているつもりでいるんだけどね。君も、その誠実だけは感じてくれてもいいね。やれやれ。これで僕にも、まともなセックスアピールでもあったらねえ。やれやれ。ほんとに、やれやれ、だよ。・・・ふう。

4

例えば、学校っていうのは八時三十分から始まるんだけどさ、僕はこの時間、いっつも眠いんだよ。僕はね、朝が凄く弱いんだ。それでいっつも寝ぼけ眼で、朝の十分HRに挑む。で、この十分HRってのも凄くくだらないものでね。君もこれに出席したら、この世にこんなくだらないものがあるのか、って目を見張ると思うよ。本当に。だってね、それは、つまり、こういう事なんだよ。最近、内の担任の田口がね、『爽やか七組通信』っていうのを作って、それでそのザラ版紙を毎日配るわけだけどさ。まあ、それはいいんだけどさ。熱心な先生って感じで。でも、その内容がね・・・ひどいんだよ。まあ、あれだよ。簡単に言うと、教師の自己満足ってやつなだけどさ。だって、全編こんな感じなんだぜ。

「七組のみなさん、おはようございます。今日も一日、頑張って素晴らしい日にしていきましょう。

さて、今月末には球技大会が予定されていますが、僕も学生時代には一生懸命参加した覚えがあります。みなさんもまた、球技大会に熱心に参加されれば、それは後に残る良い思い出となるでしょう。僕の学生時代には今のように、ボールやユニフォームなどは高機能なものではありませんでしたし、ルールなども今とは少し違っていました。ですが、僕達は熱心にそれに参加し、そして僕達のクラスはその時、無事に優勝する事ができました。僕が高校二年生の頃、丁度あなた達と同じくらいの年の頃です。」

これ以上引用すると、君はナルコレプシーにでもかかったように卒倒して眠っちまうだろうから、もうここで止めておこう。しかしねえ、君。こういうものを忙しい教師職務の間に書いて、刷って、それで毎日配ってる、そういう事を思うと、何というか、涙が出るじゃないか？。どうだろう、君？。本当に泣けてこないか。・・・おい、そこ、笑ってるんじゃないよ。あの田口先生が『頑張って』毎日書いて配ってるんだぞ。笑うなんて、ひどいじゃないか。・・・いや、僕もおかしくてつい笑っちまうんだけどさ。もちろん、心の中で、だけど。

で、さ。それだけならいいんだけどさ。ま、そういうザラ紙もらっても、みんな読まずに適当に鞆に突っ込むか、引き出しの奥に放り込んどくか、その二択なものでね。で、それだけならいいんだよ。本当に。でもね、僕はある日、この田口に呼び止められてしまったんだよ。ある、昼

休みにね。その日は珍しく、田口は教室で昼飯を食べていた。担任が昼休みに教室にいるっていうのは、生徒からしたら嫌なものでね。だって、自由な雰囲気損なわれるじゃないか。まあ、いいんだけどさ。で、とにかく、僕は呼び止められたんだよ。僕が飯を食い終わってトイレ行くとしている時にね。その時に、田口が僕を呼んだんだ。

「おい、桐野。ちょっと来い」

全く、人をどこぞの忠犬か何かのように呼びやがって。でも、僕は行ったよ。もちろん。僕は、エリート品行方正スーパー高校生なんでね。まったく。

「なんですか、先生」

僕はその時、内心、(僕、何かしたっけ?)と内心訝っていた。何かやったかな。悪い事。あれが見つかったかな、これが見つかったかな、なんて。まあ、そんな悪い事は特にしていないんだけど。

「お前、本読むの好きだろ？」

と、田口は何というか、無神経を絵に描いたような感じで僕にそう聞いてきたよ。僕は、嫌な予感がしたね。あるいは、面倒事の予感というか。

「あ、はい。まあ」

と僕は普通に答える。そしたら、田口は

「お前、今日のクラス通信、どうだった？。ちょっと、あの、あれだ。森鷗外チックに書いたつもりなんだが」

僕は、たまげたね。田口の口から『森鷗外』なんて単語が飛び出てきた事にね。それに、クラス通信？。一行も読んでないよ。

「お前、森鷗外って読んだ事あるだろ？。本、好きなんだから？」

僕がまごついていると、田口はそう畳み掛けてきた。僕を見かねて、助け舟を出してくれたのかな。それなら、自分を先に見かねた方がいいんじゃないか・・・とは僕は言わなかったよ。もちろん。そんな事はね、全然思いもしなかった。僕は品行方正ウルトラエリート高校二年生だからね。

「ありますよ」

と僕はやっと答えた。

「・・・ふうん。それで、どうだった？。俺の、今日のクラス通信？」

僕はそう聞かれて、考えたね。そして、その時ふいと、くだらない事を思いついたんだ。僕って奴はとんでもなくくだらない人間なんだけど、その気になればどこまでもくだらなくなれるんだ。ほんとだよ。

「いや、あれですね。先生の今日の文章はどちらかというと、鷗外よりは内田百閒に似てますね。なんといいですか、幻想的な所が、と言いますか。例えば、百閒は、ただの白い猫でも、『白くて小さな毛むくじらの生き物』みたいな書き方しますよね。ご存知の通り。で、こういう言い方は一種の文体なんですけどね、田口先生。わかるでしょう？。田口先生も。ここではね、ただそこには『白い猫がいた』と書くのとはまた違ったニュアンスが生まれるわけですよ。そう書く事によって。そして、比喩なんかもそういう風に文体の問題と絡まってきます。文章を書く

ってというのは、ただ描写するだけ、それだけじゃ駄目なんですよね。もちろん、その事は田口先生もよく知っていると思いますが。だって毎日、『爽やか七組通信』書いていますからね。ええ、そうです。もちろん、そうですよ。で、今日の先生の文章には、ちょっとそういうニュアンスが感じられましたね。つまり、『文体上の努力』と言うんですかね。で、何故、文章を書く人が文体を意識的にそうやって、訓練して作り上げなければならないかと言うと、これはまた大変な問題なんですけど。まあ、こういう問題は面倒なんで省きますが。今は。でも、先生、今日のクラス通信は良かったですよ。そうだ、素晴らしかった。そう、今日の『爽やか七組通信』はね

僕はそれだけ言うと、さっと頭を下げて、それで田口の前からさっさと去っていった。僕はね、その時には頭がおかしくなっていたんだよ。本当にさ。多分、物凄くフラストレーションが溜まっていたんだろうね。あるいはストレスが。そういうものってさ、ただなんとなく生きていくだけでも溜まってくるものなんだよ。自分の中に。どっぴりと。で、その時に、何かがかきかけになってそういうものが弾け飛んで、全部外に出ちゃったんだな。僕はね、田口の前から去ってトイレに行く時、もう物凄く後悔したんだよ。ほんとに。くだらない事言っちゃったな、って。僕はトイレに行って、それで鏡を見て自分に呼びかけた(トイレに誰もいなくて本当に良かった)。「お前は一体、何やってるんだ?」って。クソツタレ。全くもって、僕は馬鹿な奴だよ。でも、君は誤解してはいけないな。悪いのは、あんな下らない事毎日書いて、刷って、配ってる田口の方なんだよ。そう、悪いのは全部、田口。この世の中のありとあらゆる悪はね、うちの担任の田口のせいなんだ。ほんとだよ。アフリカの子供が今日の食べ物に困るのも、それは田口があんな馬鹿みたいなプリントを毎日刷って配っているからなんだ。それは、論理的に説明できるね。どうやってって?。・・・うーん、まあ、馬鹿話もこれぐらいにして置こうか。まあ、僕ってひどいんだよ。本当に。そしてね、それから一週間くらいは、僕は田口の目をまともに見れなかったよ。マジで。田口の方から僕を見る目は少し変わったみたいだったけど。『こいつは一体どういう奴なんだろう?』みたいな感じでさ。でも、それから田口に、その日の事について聞かれた事はなかった。やれやれ。ほっとしたよ。田口にまた森鷗外の事なんかについて聞かれたら、僕は何を言えばいいのかももうさっぱりわからなかったからね。

5

君は僕の事を、滑稽だと思うだろう。そりゃあね、僕も僕自身が滑稽に見える事はあるさ。くだらない、愚かしい人物だとは思わさ。でも生きていく限り、どんな人間も滑稽なんだよ。滑稽だというのが真実なのさ。本当に。君は分かるだろう?。・・・君は何もした事がないからそんな事を言うのさ。どんな人間も、人の意識という名の魚眼レンズに写ってしまえば、そいつは滑稽な生き物になっちゃう。それは例えば、テレビカメラに映しだされた人間が誰も彼も滑稽に見えるのと同じ事だね。で、その映し出された人間がまじめになればなるほど、そいつは滑稽で愚かしい者に見えてしまう。今、君はパソコンの前だか何かのモニターの前でじっくりとこの僕を観察しているのかもしれないけれど、でもね、そうやって見ている君を見ているもう一つの別のカメ

うだって、どこかに存在するかもしれない。もしそうだったとしたら、多分、君だって僕と同じくらいに滑稽に写しだされている事だろうよ。この僕と同じくらい、滑稽にね。

いやあ、でも、学校っていうのは楽しい所だよ。本当に。僕はね、ここではこうやって色々言っているけれど、でも生活する人間としてはそれなりの常識家であるつもりなのさ。もちろん、さっきみたいに、時々、わけのわからない事を言いもするけど。でも、生活っていうのはそういうものだろう？。どう思う、君？。多分、この僕達の生きている世界ではさ、本当に最後の言葉、黙示録の言葉っていうのは言ってはいけない事になっているんだ。そして、この世界のどんな人物も自分の中に、その最後の言葉、黙示録の言葉っていうのを秘めているんだ。僕は何だか、そんな気がするんだけどね。そして、その最後の言葉は日常生活では言ってはいけない事になっているので、人はそれをネット上に吐き出したりするんだ。僕も、やられた事があるね。ある日、ふと気まぐれにインターネット上で自分の名前を検索してみたらさ、そしたら、ヒットしたんだ。僕の事を書いた言葉が見つかったんだよ。意外な事に。僕はたまげたね。で、その書いた内容を見ると、「桐野はいつも気取っててウザい」なんて内容だった。どいつが書いたのかはよく分からなかったけどね。それはうちの高校の掲示板でね。本当に、インターネットっていうのは色々な言葉や憎悪が書かれているんだね。僕はね、その掲示板に「僕が桐野だ。文句あるか」って書いてやろうかと思った。本当に。でも結局、僕は書かなかった。何というか、陰湿なものは放っておくしかないんだ。それに付き合うというのも、嫌なものだしね。で、僕は何も書かなかった。そして、僕はノートパソコンの前でさ、宣誓を行ったんだ。『不肖桐野龍一、十六才はこれから一切、インターネット上で自分の名前を検索しない事をここに誓います アーメン』ってね。残念ながら、神父はいなかった。でも、その宣誓は荘厳なものだったよ。天使が二体、天から降りてきてね。それから、ヨハネとキリストも降りてきて、ついでにサタンと、後、ドストエフスキーとシェイクスピアとモーツァルトも降りてきた。それで、そいつらは僕の肩をぼんぼんと叩いて、『汝は今、正しき事をしたり。インターネット上で自らの名を検索する事は現世において非常に危険な事なり』って言ってくれてね。そいつら、すぐ天に帰っていったけど。で、僕はノートパソコンのふたをぱたっと閉じて、思ったんだ。『僕は何をやってるんだろう？』って。

こんな事はつまらないって？。・・・そうだね。確かに、君の言う通りだね。多分、僕って凄い自意識過剰な人間なんだと思うよ。ほんとの話。で、僕の自意識っていうのさ、他人の意識まで意識しちゃうから、性質(タチ)が悪いんだよね。でも、僕のこんな性格は、フロイトとかラカンとか、そういう偉い先生には分析してほしくないんだけどね。だって、ああいう精神分析科医っていうのは、みんな先生面してこっちに近づいて「あー、君のよく見る夢は何だね？」って。偉そうだね。実際は偉そうじゃないかもしれないけど、とにかく、嫌なんだよ。分析されるっていうのが。だって、僕はもう僕を散々分析し尽くしたみたいなものだからね。僕は自分で自分を粉々にしてしまったんだよ。くだらない事にね。で、その残骸を今更秤にかけられても、僕としちゃあ、困るんだ。だって、その残骸だって僕の一部のわけだからね。僕はくだらない自分が好きなんだよ。かといって、犯罪者にはなりたくはないけれど。

ところで、昔、僕はバスケットボール部に入っていたんだ。昔、というか二、三年前の事だけ

どね。中学の時。で、そこの先輩というのが厳しくてね。僕は入部した当初は勘違いしていたけど、そこは意外に体育会系の厳しい部活だったんだ。僕としちゃあ、困ったよ。何せ、僕のいた中学っていうのは強制的にどこかの部活に入らなきゃいけない仕様だったからさ。適当に目をつぶって引いたカードが最悪のジョーカーだった、なんて気分だったんだよ。「おい、一年。お前ら、グラウンド三周してこい」みたいなね。僕はそういうのは漫画とアニメの中にしかないと思ってた。でも、現実にあるんだね。そういう部活、そしてそういう人が。もちろん、僕はすぐに幽霊部員になったよ。幽霊部員。僕はこの言葉の響きが好きだな。君はどう思う？。僕はね、幽霊なんだ。実在しない。だから、全ての言葉は僕を素通りする。気楽なもんだよ。

でも、今も僕は不思議に思うんだよ。例えば、うちの担任の田口にせよ、あの体育会系のバスケットボール部の、物凄く威張ってて、なおかつ後輩の女の子をつまみ食いにして、その後も色々あって最終的には退学処分食らった当時の先輩にしろ、なんというか、その自意識の構造っていうのはどうなってるんだろうね？。僕は自意識というのにとっても興味があるんだ。君はどう思う？。僕は自意識というのは、自分で自分を意識する事だって思ってる。例えば、注射針を自分の腕に刺す。すると、その痛みを僕は感じる。そして、そういう、注射針を刺している自分と刺されて痛がっている自分とを同時に意識する。そういうものが自意識だと、思うんだけどね。そしてね、そういう事ってのは他人の痛みも自分のように感じる、何というか、そんな感じ方へとつながっていくんだな。僕は痛い事が苦手だね。小学生の時、クラスメイトが彫刻刀で指をざっくりと切ってばっど血が出ちゃった時があったけど、あれは痛そうだったな。あの時は僕は思わず、そいつが切った人差し指の部分、その部分をかばうかのように、自分の人差し指をさすっていたよ。無意識のうちにね。ところで、こういうのって意味ある事なのだろうか？。でも、確言してもいいけど、あのバスケ部の先輩は人の痛みなんて全然感じない奴だったと思うよ。田口もまあ、似たようなもんじゃないかな。誰かを攻撃したり、傷つけたりしてもね、その痛みはあくまでも他人のもので、そしてそれは自分の痛みだと、そういう風には感じられないタイプなんだと思う。両方共。で、僕は痛いのが嫌だからね。だけど、君も知ってる通り、この世界じゃ、人を傷つけないと自分の存在をちゃんと立証できない。そういう場面もさ、人生にはあるじゃないか？。そういう時っていうのは僕らはもう、有無を言わず、それをやらなきゃいけない。そういう時には相手をぶん殴らなきゃいけない。でも、そうやって広がった自意識の世界だと、そうやって他人を殴る事は自分を殴る事にもつながるんだな。だって、人の痛みを自分のように感じるわけだからさ。だから、他人を殴る事は必然的に自分を殴る事に通じてしまう。でも、そんな時もやっぱり相手を殴らなきゃいけない。だって、相手はこちらの痛みなんて、全然理解できるような奴じゃないんだからね。だから、僕はあのバスケ部の先輩にさ、楯突いたほうが良かったのかな、なんてそう思う時もある。だって、あいつは言ったんだよ。僕がただだと練習してたら、急につかつかつと僕の方にやってきて、それでこう言ったんだ。

「お前、生意気だな」

おいおい。僕のどこが生意気だって言うんだよ？。黙ってランニングして、そして入らないジャンプシュートも、ボール集めだって皆と一緒にやったぜ？。おいおい？。どういうこったよ？。ちな

みに、僕は昔から、よく言われるんだよね。これがまた。「お前は生意気だ」とか「桐野君って何考えてるか全然わからないよね」とかさ。うるせえよ。僕は僕の事、考えてんだよ。僕はそれに、この宇宙の事だって考えている。僕はパスカル並みの頭脳と思考を持つ高校二年生なのさ。・・・嘘だけど。で、僕はその時、「はあ」って感じで顔を上げて、それで言ったんだよ。

「ちゃんとやっていますが」

「お前・・・」

僕がそう言うと、その先輩はビキビキっと顔を引きつらして、それで僕をどんと押したんだよ。本当に。手の平で。で、僕は後ろにずっこけた。その時、皆がやってた練習がパタッと止まったね。そう、それは映画かアニメのワンシーンのようだったね。君にも見せたかったよ。で、その先輩はこう言った。

「前から、思ってたんだよ。お前は生意気だって」

それで先輩は倒れてる僕につかつかつと近づいてきた。僕は起き上がろうとしたけど、その肩口をそのクソ先輩が蹴ってきてね。で、僕はもう一度後ろに倒れこんじまった。僕ってね、ひ弱なんだよ。痩せてるし、力もあんまりない。そういや、中学の時、『十キロ走』っていう小規模なマラソンイベントがあっただけ。その時に、女子に次々と抜かれていったのは情けなかったな。あれは悲しかったよ。マジでさ。

「お前なあ・・・」

そう言って、先輩は更に僕に何か危害を加えようとした。殴ろうとしたのか、蹴ろうとしたのか、よく覚えていないけど。で、その時、僕は怖かったんだよ。単純に、ただ怖かった。それで情けない事に手で顔の辺りを守って、それで後ろに身を引いた。その時僕は怖かったんだよ。立ち向かおうなんて、夢にも思わなかった。それが僕の悪い所なんだと自分でも思う。僕もプロテイン飲んで、そしてボクシングでもやって、そんな先輩ぐらいぶん殴るか、それか少なくともその攻撃をさっとかわすくらのスキルは身につけていなくちゃならない。でも、そういうのは僕はからっきし苦手でね。だからいつだってサンドバッグなんだよ、僕は。困った事にね。でさ、その時にはもう、周囲の他の先輩がその先輩を押しとどめていた。「やり過ぎだ」ってね。で、その後、僕は体育館の外に出された。「お前、今日はもういいから、帰れ」って、その止めてくれた先輩に言われてね。で、僕にそう言った先輩はさ、割と良心的な人だったんだよ。でも、その先輩はその時に僕に言った。「お前、この事あんまり人に言うなよ。次の大会出れなくなったら、事だからな」。確かに、暴力事件には世間はうるさくなってるもんで、その事を先輩は気にしてたんだと思う。だから、僕をそうやって口止めした。でも、僕はその先輩は嫌いじゃなかった。その先輩はバスケットボールに本当に熱心に取り組んでいた人だったからね。だから、次の大会を気にしてそう言うっていうのも、気持はよくわかった。かといって、僕の中にはわだかまりも残っていた。それで僕は残念なような、またどこか煮えたぎっているような、そんな不可解な感情を抱えながら家路をたどったんだ。その日は暑かったよ。シャツが汗でぐしゃぐしゃになるぐらいにね。

で、翌日の事だけれど、もうその辺りから、僕は幽霊部員になっていた。そして、僕はもう部活にほとんど顔を出さなくなった。でも、後で聞いた話だけれど、その僕を突き飛ばした先輩っ

ていうのは、随分前から部活内でも嫌われていた人らしい。それに、後輩の女子に手を出している、ってのも噂になってた。そういうのは僕と同期でバスケット部に入った友人が教えてくれたよ。そしてその友人は「あいつはクソ野郎だし、気にする事はねえよ。お前、戻ってこいよ」と言ってくれた。ありがたかったね。でも、僕が戻る事はなかった。僕はそれから樽の中に入って、そして本を読んで暮らしたんだ。古代ギリシャのディオゲネスみたいだね。・・・でも、僕らには古代ギリシャのように、入る樽がないんだよ。本当に、どこにもさ。で、そういう事件とか色々な事が、僕を、僕の脳髄という名の樽の中に押し込めていったんだ。もちろん、自分からそんな場所に入り込んだと言う事もできるけど。

まあ、そんな事もあってね。色々あったんだよ。本当に色々だね。僕はまだ十六才だけど、もうこの世の中のあらゆる事を既に体験し尽くしたような気がしている。『永劫回帰』だね。ニーチェだよ。でも多分、ニーチェのせいだけでもない。だって、僕らは日々、テレビとインターネットを通じて、色々な情報とかニュースにさらされているわけだからね。だから、僕らがそんな情報に埋もれて、自分という名の情報を見失うのも当然だよ。え？。今、うまい事言ってる？。僕が？。・・・へへ、そうだね。僕は今、うまい事言ったね。君にだけ聞こえるように、こっそりと。君はもっと僕を褒めてくれたまえ。僕はね、褒められて伸びるタイプなんだ。自分で言っちゃうけど。え？。もう、急に褒める気がなくなったって？。そうかい。それなら、まあいいけど。まあ、君のその気持は、僕もよく分かるな。僕らが褒めたいのは、前を向いて走っている奴らに対してであってさ。そいつらに声援送ったら、そいつら急にくるっとこっちを振り向いて、「ありがとう」、なんてね。いや、褒めたいのは走っている姿勢に対してであって、君の存在そのものに対してじゃないんだよ、というその事を僕らは勘違いしがちなんだね。・・・ところで、君、ありがとう。僕を褒めてくれて。

なあ、君、聞いてくれ。僕にもね、ジャン・ジャック・ルソーのように、何か自分の内に語るべき何かがあればいいと思うんだけどね、でも、そんなものはほとんど一欠片も見当たらないのさ。田山花袋って作家に『蒲団』って作品があって、確か、女子大生か何かと不倫して、それで何か、その女の蒲団の匂いを嗅ぐとか嗅がないとか、そんな作品だったと思うけど。そういうのって面白いんだろうか？。今はもう、田山花袋なんて誰も読んでないけど。僕にも、蒲団の一つでもあればいいんだけど。僕には、何も話すタネがないもんね。

でもね、聞いて欲しいのはこんな僕にも過去があって事なんだ。過去が。十六年――。思えば長かったよ。でもね、その十六年というのは空っぽなんだ。まあ、君もここまで僕の話聞いてくれたら、よく分かると思うけど。本当に、空っぽなんだよ。空っぽ。僕の人生空っぽなんだけども、でも、僕がそれ以外には選べなかったってのも事実でさ。例えば、まともな恋愛なんて僕はした事ないんだけど、でもバレンタインにチョコをもらってホワイトデーにお返しするなんて僕はうんざりだし、誕生日に何かプレゼントする為に一生懸命バイトするとかさ。どうでもいいんだよ、そんな事は。確かに、素敵な事かもしれないけどさ、でも、そんな事が一体、何だろう？。僕らには広い青空があるじゃないか？。そう、この世界はどこまでも広がっている！。僕達は精神の翼を広げて、どこまでも飛翔できる！。そうだろう？。君！？。もちろん、これは空元気でね。体育教師の原口の真似さ。あいつはうるさいんだよな。朝会うと、「おはよう！。桐野君！」

って。僕は「あ、どうも・・・」ってだらっと返すんだけどね。まあ、どうでもいいんだけどさ、そんな事。

ところで、僕は一杯喋ったねえ。今までの所。君はほんとに聞き上手だね。僕は感謝してるんだよ。君が僕の話はずっと聞いてくれてさ。でも、僕もそろそろ行かなくちゃならない。実は、ちょっと行く所があってね。実は最近、僕は塾に通いだしたんだよ。近くの『光星塾』という塾にね。何か、星でも降ってきそうな名前の塾だけど、実際にはそんな事はない。そこにあるのはただ真っ白なホワイトボードとマジックと、そして僕らに配られるザラ紙だけ。それで、その授業で宿題をやったり、あるいは『大化の改新は645年で～』なんてやったりするわけだ。まあ、『大化の改新』なんて糞食らえだけどね。多分、蘇我入鹿だってこっち見て、あっかんべーってしてると思うな。それで、僕はその事を解答用紙に書き込む。「蘇我入鹿は西暦645年にこっち見てあっかんべーってしてました。タイムマシンで見てきたから間違いないです」。当然、それはx。そして端っこに「ふざけるな！」って小さく赤ペンで書かれてしまう。僕は、ふざけた事はないんだけどね。僕は生まれてこの方、ふざけて生きた事は一度足りともないんだけどね。まあ、でも、そのあたりの事はなかなか人には伝わりにくてね。それで、僕は後で先生に謝りに行ったよ。「あの時は具合が悪くて、ついテンションが高ぶってあんなものを書いてしまったんです。すいませんでした」って。先生は眉をしかめてたよ。どうして僕があんな事をしたのか、分からなかったんだろうね。それでその時は「もういい」って許してもらったけどね。確言してもいいけど、もし僕が何かの犯罪犯して捕まったら、あの先生は絶対次のように証言すると思うな。「あの子は将来、何かやらかすと思ってました。『やっぱりな』という感じですよ」ってね。で、検察は僕を精神鑑定にかけて、それで僕は解離性人格障害とか何とか、そんな病名をつけられちゃうんだな。それで、世間からは轟々たる非難を浴びてね。そして、もうそこまでくると、犯罪者というのも一種の役者みたいな立場になっちゃってさ、世間に対して大立ち回りできる主役の場所に立つ事になってしまう。気持ち悪いよね、そういうの。僕は犯罪者は嫌いだけど、それを鬼の首でも取ったかのように大げさに糾弾する奴らも嫌いなんだ。まあ、今日は塾はさぼるけどね。腹が痛いって事にしてさ。

でまあ、僕もこうやって外をぷらぷら歩いていると、色々考えるんだよ。ああ、僕の人生って何もなかったんだな、って。これが、恥ずかしいくらい何もなくてね。例えば、僕の家族の事。そういえば、僕はまだ君に家族の事は喋っていなかったね？。でも、これがあるんだな。僕にも一応、家族というものがあるんだよ。君。それも、それなりに「きちんとした」、「普通の」家族がね。・・・僕の妹は中学三年生で、これはジャニーズ狂なんだ。まだ、彼氏はいないみたいで、どっちかというとな普通の、でもちょっと引っ込み思案の女子ってところかな。時々、僕の所に宿題を聞きにくる。いや、それは何年か前の事で、最近はまだ彼女は僕の事を信用していない。多分、僕が馬鹿だって事に気づいちゃったんだろうね。残念な事に。妹は、高校受験の真っ最中だしさ。でも、僕と同じ公立高校に入るつもりらしいよ。それで、一応今、少し勉強しているところらしい。へえー、って感じだけどね。でも、ま、うちの妹が私立に行こうが公立に行こうが知った事ではないんだよ。教育？。何か、もうその言葉自体が笑えるよね。言っとくけど、僕の天邪鬼は筋金入りだよ。僕みたいなゴミ野郎が自衛隊に入ってその精神が叩き直されると思っ

たら大間違いさ。他人の事はなんとでも言える。ところで、この妹は佐知って言ってね。昔は可愛かったんだよ。僕ともどもさ。でも今はそうも言えないな。生意気になっちゃって。僕の事なんかで頭から相手にしてないんだから。佐知はよく言うんだよ。

「お兄ちゃんにとってはどうせ全部の事がくだらないんだから。その内に、お兄ちゃんは人生の事で苦しむようになるわよ。絶対に。そんな風に色々なものを馬鹿にしてられるのも今の内だけなんだからね。・・・私の事も馬鹿にしてるんでしょうけど」

全く、見識のある妹だよ。うちの佐知は。小学生の頃は可愛かったんだけどね。僕ともども。でもね、別に仲が悪って事もないんだよ。まあ、気が合うってほどでもないけどさ。でも、時々、僕の部屋から文庫本やら漫画やらを借りて持って行ったりするな。うん、そう、その辺りは僕ら仲は悪くないんだね。で、佐知はこんな事を言ったりする。

「お兄ちゃん、最近の何かおすすめの本ある？」

なんてね。佐知は僕がちょっとした読書家だって事を知っているんだよ。まあ、それはほんとにちょっとしているけどね。それで、僕は、

「うーん、そうだな。カントの『判断力批判』なんてどうかな。これはゲーテの美学にも影響を与えたし、君がこれから画家か作家になるなら、読んで置いて損はないよ。でも、翻訳はわかりにくいから、原書で読んだほうがいいね。いや、ドイツ語なんて簡単だよ。日本語よりは構造的にはラクだからね」

これはもちろんジョークで、僕はそんな事言わない。大体、ドイツ語なんて単語一つも知らないし。代わりに僕が進めたのは、確か、なんだっけな。『涼宮ハルヒシリーズ』だっけかな。これは最近のものではわりとおもしろいんでね、どうかな、と進めて置いた。そしたら佐知は「ふーん、どんな話？」って聞くもんで、僕はそのあらすじを説明してやった。そして、それが今の世の中とどんな風にシンクロしているかも、ちょっぴり言っておいた。佐知は興味持ったみたいでね、僕の本棚から持ってったよ。二、三冊ね。僕は割りとそういう風に本の中身を説明するのが得意なんだよ。これは自慢できる能力だと自分じゃあ思っているけどね。でも、学校の授業やテストでこの能力がきちんと発揮された事は一度もないね。困った事に。

後は僕の両親なんだけどさ。四十五歳っていうのは前にも言ったよね。前にも。そう、それで僕の母も父も四十五歳でね。なんでも、最初は職場の同期だったらしい。お互い新人でね。何かそれで新人同士でサークルみたいなのできて、そしてそうこうしている内に、恋愛して、結婚して、そうして僕と佐知が生まれたっていう寸法なんだ。僕の親は仲は悪くなくてね。まあ、ものすごく素晴らしい親ってわけじゃないけど(子供の目から見て『素晴らしい親』はこの世界始まってから一人もいなかった。それは、保証する)、ものすごくひどい親ってわけでもない。うちの親父はプロ野球が好きで、うちの母親はたまに絵画を見にいたりする。でも、二人ともてんでからきし何の感性もないんだよ。いや、ほんとに。最近起こっている物事はなんにも分からないし、僕が子供の頃は僕がテレビゲームしているとよく親父に注意されたもんだ。「そんなにゲームばかりやっていると馬鹿になるぞ」って。余計なお世話だつうんだよ。でも、これは確言できるけど、もし僕が東京証券一部上場の「スクウェア・エニックス」なんかに努力して入社する事になったらさ、うちの両親は涙を流して喜んで、それですいでに赤飯も炊くと思うよ。

ほんとに。で、親父は多分僕に言うんだな。「でかしたぞ、息子。これからはゲームの時代だ。お前は本当によくやった」・・・まあね、現実ってそんなもんなんだよ。で、そういう場合、うちの親父は十年前に「ゲームするな」って言ってた事はとっくに忘れてるんだよ。いい気なもんだよね、全く。ま、全部僕の想像なんだけれどさ。ハハハ。ま、なんにせようちの両親はいい両親だよ。僕はこの家庭に生まれて幸せなんだよ。ほんとにさ、心からそう思っている。心から・・・君は今、笑ったね?。まあ、君が笑うのも無理ないか。僕って天邪鬼だからね。天邪鬼というのなかなか辛いもんでね。いつも自分をごまかすか世界をごまかして生きるかの、その二つしか選択肢がなくて、それでいつも困っているんだよ。天邪鬼というのはそういうものでね。で、まあ、僕は学校じゃあ、それなりの常識的な人間なのさ。つまり僕は普通に生きるにあたっては、自分をごまかす方を選んだってわけね。たまに、僕は世界を裏返してやりたい気持ちになる。指しかけの将棋盤をひっくり返すみたいだね。どいつこいつも薄汚い歩兵ばかりで、金も角も王将もいやしない。でもそれをひっくり返す力は僕にはないんだよ。だから僕は今日も、普通のすすけた歩兵を演じてるってわけさ。一步ずつ進む、あのとぼけた歩兵の一人になりすましてね、そうやって今日も今日を生きている。

7

そろそろ君は、僕の話に飽きてきたかもしれないね。実を言うと、僕自身が自分の話に飽き始めているんだよ。本当の所。僕がね、この世界の嫌な所はなんでもかんでも瞬間的に行き過ぎていってしまうってところさ。学校でね、皆色々な噂話するじゃないか?。で、それが僕の耳にもスマートフォンやら何やらを通じて入ってきたりする。でも、それらは一週間単位でころころと変化するんだ。でもね、特にひどいのは女子同士のあの無益な会話だね。女子ってどうしてあまつまらない事をべちゃべちゃ喋るんだろう?。まあ、男子はもっとひどいけどさ。で、その女子の会話を僕なんか傍で聞いていると、正直、まるで会話の態を成していないんだよね。ただそれぞれがそれぞれに、もう思いつくままべちくちややって、それで話を聞いている奴なんて一人もいないんだよ。皆が自分の思いのたけを語るんだけど、誰一人として聞いてなくて、そしてただ会話は連想と類推でぼんやりとつながっている。君もああいう光景を見ると、人間というのがどうあがいても互いに理解不可能な生き物だという事が分かると思うよ。人間ってのはほんとに不思議な生き物だと思うね。それで、女子同士が「○○ちゃんとは親友なの～」なんてぐだぐだ言ったりするけどさ、傍で聞いていると、(どこが親友だよ。前にお前の悪口を○○ちゃんがどぎつく言っていたの聞いた事があるぜ)なんて考えたりするんだけどさ。でも、もちろん、そんな事は僕は口には出さない。僕はそういう事は口には出さないけどさ、僕にとって一つだけはっきりしている事は、僕には親友なんて一人もいないっていう事。僕もそのうにやむにやした女子とは対して違わない存在なわけだけどさ、でもま、僕はその女子みたいに自分で自分をうまく騙したりごまかしたりはしないっていう事なんだよ。僕のポリシーとしてはさ。まあ、ポリシーなんていいんだけど。で、そのポリシーに従うなら、僕にはこれまで一人の親友もいなかったし、これ

からも「親友」などというものができる日は永久に来ない。それは、確かだな。確かフランスの誰だかが「我々は互いに誤解しあう程度に理解し合えばそれで十分だ」と言っただけだし、その言葉の意味はよくわかんないけど、でも世間の「親友」の99%が誤解により成り立っている事は間違いないね。まあ、残りの1%はさ、もしかしたら存在するかもしれない「本当の親友」のために取っておいたんだけど。一応ね。

こんな事を話していても仕方ないか？。僕も、疲れるんだよね。こんな自分自身のごちゃごちゃした討論にさ。僕って奴は授業中もずっとこうやって頭の中で一人で会話してるんだよ。それって大変じゃないか？。髭もじゃもじゃで、女子生徒に対して妙に馴れ馴れしい現代文の鹿田の授業の時間とかさ。僕は鹿田の顔を見ながら、考えるんだよ。「こいつは一体、どういう経緯でこういう仕事についているんだろう？。一体、僕達の事をどんな風に思ってるんだろう？」って。それで、僕は鹿田が夏目漱石や森鷗外について色々言い出すと、もうすぐにうんざりしてしまうんだ。何せ、鹿田は右も左もわからないし、夏目漱石や森鷗外以前に、僕らが鹿田のだらだらとした喋りとその無駄な博学披露に心底うんざりしているって事にすら気づいていないんだからね。人の気持が分からなくて、文学が分かるもわからなにもないだろう？。でも、そんな事はないかもしれないし、実は鹿田は僕達の心を全部見抜いているのかもしれない。時々、そう考える事もある。僕はね、小学生の時には思ってたんだよ。もし、自分のこの心の中をこのクラス中の人間が見抜いていたとしたらどうしようか？。僕が栗田さんの事が好きだって事がばれてたらどうしよう？ってね。僕が小学生の時はそういう事がとてもとても心配だった。それでたまに、机の上の消しゴムを念力で動かそうとしたりね。でも、消しゴムは動かなかったね。僕の念力も大した事はないんだね。僕、町内会のビンゴすら当たった事ないしね。僕って多分、神様に見放されているんだな。全く、ひどいもんだよ。

まあ、僕ってそんな風に色々ごちゃごちゃと考えるんだよ。本当に僕は考えるのが好きでね。色々な事にうんざりとしているもんで、それでその代わりに考えるんだな。僕という無——虚無の中に思考という「有」が入ってくる。そういう事でね。多分ね。適当だけどさ。ま、疲れるんだよな。こんな自分に。で、時々気晴らしにどこか出かけたりするわけだけどさ。ジブリの主人公並みにさわやかな笑顔で、鞆にサンドイッチ入れて口笛吹きながら自転車漕いでさ。僕ってば、足の筋肉がないもんで、近くのきつい坂を自転車に乗ったまま登り切る事ができないんだよね。この前、僕よりも遥かに年配のおばちゃんが自転車でその坂をさっと上ってたもんで、僕は驚愕したよ。全く、僕ってばひどいもんだ。その日は家に帰ってからスクワットを三十回やったね。へとへとになったけど、もう次の日はやらなかった。スクワットはその日限りでおしまいさ。

しかし本当にひどいもんだね。僕はどれだけだらだらと君に語ってきたんだろう？。でも、僕も楽しいんだよ。普段喋れない事がこんな風に喋れてさ。現実生活では、僕には安達とか秋川とかいう友達が一応いるんだけど、こいつらと喋る事はものすごくくだらない事ばかりでね。女の子の話もほとんどでなくて、大体、ゲームとかアニメとサッカーとかスポーツの話だったりするんだ。まあ、男子なんてそんなもんだけど。隣の学校の不良が事故起こした時の話とかね。そんな不良がどこでどうなろうと知った事ではないんだよ、僕は。でも、僕ってば本当にひどいなあ

、と思うよ、自分でも。こんなくだらない話を、てんこもりになったざるそばみたく喋ってさ。なので、僕は最後に少しだけ、自分の中でもとっておきのエピソードを喋ってから消えようと思うんだ。そして多分、君は僕が消えたら、とてもさみしく思うだろう。いや、思わないかな?。どっちにせよ、僕は最後にこの事を君に喋っておこう。そしてこれは僕に起こったエピソードの中でも、一番くだらない事でね。でも、まあ語る事にしよう。他にやる事はないし。塾なんか...行きたくないし。

※

これは実は、二週間前に起こった事でね。実はこの事っていうのは、僕がこうやって『君』に語りかける原因にもなった事なんだよ。ほんとうにさ。で、それはどんな事かって言うと、まあ、かなり言いづらい事なんだけど。多分ね、何かを語る時に一番むずかしい事っていうのはさ、それが自分にとっては切実な体験なのにも関わらず、こうして口に出してしまうと、それは何か嘘っぽい空虚なものになってしまうという点なんだ。そしてこの点をクリアするのは非常に難しい。いや、ほんとに難しいんだよ。例えば、『夢』ってあるよね?。自分にとってはとても大切に、重大な夢だったのに、それを翌日友達に話したりしても、その友達は「ふーん、それで」なんて調子だ。思うに、人生というのはそんな事の連続なんだと思うよ。僕はまだ十六だけどさ。でも、そんな気がするな。本当にその人にとって大切な事、重大な事っていうのは、いつもその人の胸の内をただもうゆっくりと流れていくだけで、そしてそれが人目に触れる事はない。だから、皆こんな風に誰も彼もが退屈そうな顔をしていて、なおかつ、こんなにも皆自分自身について語りたがっている。そういう気がするな。自分を知ってほしい、自分を主張したい、そんな気持ちがあるんだけど、そもそもその人はその「自分」というのがよく分かっていないので、その主張は空回りする。だから、世の中は何というか、こんな僕のひとり語りみたいな空虚な叫びで埋め尽くされてしまう。何というか、僕はそんな気がするんだよ。まあ、哲学的な話だけどね。実を言うと、僕は『哲学者』なのさ。クラスで一番のね。

で、まあ、その僕のエピソードだけどさ。それはあらゆる意味でエピソードの存在しない僕にとっての唯一のエピソードなんだけどね。で、まあこれは言ったように二週間前の話なんだけど。実はその二週間前、いや、その少し前から僕の頭の雲行きは怪しくなってきたね。僕はね、もう自分で自分にうんざりしてきたんだよ。その頃...つまり、四月頃かな。春の陽気で世界がやや明るくなる時。人間の曇った意識を春の陽が少しだけ明るくしてくれる、そんな時期。僕はそんな頃に、もうこんな自分自身にうんざりとしてしまったんだよ。実際、塞ぎこんでいたね。あの頃は。でも、僕は自分がそんな暗い気持ちだなんて事を周囲に悟らせはしなかった。僕はね、そういうのはほんとに巧いんだよ。むしろその頃、安達は「最近、お前楽しそうだな。何か良いことあったのか?」って聞いてきたね。僕は「まあ、ちょっとね」と答えておいたよ。そしたら、それを聞きつけた隣の島田さんが「桐野、彼女でもできたの?」って聞いてきてね。何だか面倒な話になりそうだったので、僕はその辺り適当にぼやかしておいたよ。でも、その時期、

僕は本当に落ち込んでいたんだよ。何故って、もうそんな自分自身に心底うんざりとしていたんだな。僕はね、こんな風に自分自身とひたすら討論し続けて、そして出口をどこにも見つける事のできない自分自身に嫌気がさしていた。だって、世界には出口もないし、僕自身の中にも出口はないからさ。なにもかも、くだらないし。うんざりだったよ、本当にさ。こういうのを中二病だとか、青春故の悩みだとか言って馬鹿にする奴らもいるけどさ。そりゃあ、保険と年金とへそくりと、今月出る新型テレビのローンの事だけ考えている人達からしたら僕は馬鹿馬鹿しい事で悩んでいるかもしれないけど。でも、僕はそういう人達に言いたいんだよ。「君達は目の前の事しか考えていないから、そんな何にも悩んでいないような振りができるんだ。人間っていうものには、やがてぶつからなきゃいけない巨大な壁というものが存在する。そして、僕達はそれをとて痛切に感じる。...いや、感じない奴もいるけど、少なくとも、それはやがて僕達がぶつかる事になっている壁なんだ。僕達はどうやっても、その未来の方にある巨大な壁にぶつからざるをえない。その日は必ずやってくるし、その時僕達はみんなペしゃんこになる。例外はない。だけど、君達は目の前十センチの事しか見えていないから、その壁の事を考えている僕を『杞憂』だと笑う。だが、僕はそれは杞憂だとは思わない。僕は君達と違って、悩む。苦悩する。僕は僕だから、誰よりも、この世界よりもはるかに痛切に苦しむ。痛む。だけど、だからこそ僕は僕でいられる。...本当に、くそったれだと僕も思うよ。でも、これはどうしようもないんだ。そして、その壁が未来にある事が分かっているのに、どうして皆はそんなにはしゃいだり、笑ったりする事ができるんだろう？。僕には理解できないね。ま、人生にユーモアは必要だけどさ」

まあ、そんな感じで僕も悩んでいたんだよ。当時ね。(今もかもしれないけど。)とにかく、僕はそんな風に悩んでいた。苦しんでいた。外面的には陽気だったけどね、でも内面は暗かった。人間の内面っていうのは元々、暗いものなんだ。明るい振りをしている馬鹿はいるけどね。それで、僕はその頃辛かった。とてもね、とても辛かった。だって、僕の唯一の友達はこの僕。僕は、孤独だったんだよ、君。君、僕は孤独だったんだよ。十六にして、『実存的』孤独というやつを感じていたわけだ。なかなか、辛かったけどね。僕はもう自分にうんざりしていた。世界にはもっとうんざりだったし。誰とも喋りたくなかったけど、僕はその代わりにやたら、周囲の人間としゃべりまくった。僕はその頃、一番くだらない、一番ゴミクズみたいな話題をあえて選んで、それでその事を周囲に向かって吹っかけていた。そういう事をあえて意図して喋っていた。自分の辛さを紛らすためにね。おかげで、クラスで番長みたいな立場してた田村ってリーダー格の女子から、怒られたよ。「あなたって話す事が下品なのよ」ってね。へいへい、って僕は謝ったけどね。でも、内心はそれどころじゃなかった。辛かったんだ。本当に。

僕が辛かったのは、こんな風に僕が果てしない自分との問答を続けなきゃならなかったって事で、他に理由はない。自分に、うんざりしちゃったんだな、僕は。で、ある日――それは日曜日だったわけだけど、僕はさ、急に思いついて、それで自転車で一人どこかへ出かける事にしたんだ。それは全く唐突に思いついた事でね。日曜の朝に目覚めるやいなや、僕は春の道の中を一人、ママチャリで疾走している自分の姿が浮かんだ。そうだ、これだよ！ってなぐらいにね、それは率直な思いつきだった。ほんとに。それはね、まるでポール・マッカートニーが「イエスタデイ」のフレーズを寝起きに思いついたぐらいの、それぐらいのショッキングな思いつきだった

たんだよ。え?。ポールとお前を一緒にするなって?。悪かったよ。でもま、僕はそう思いついたんだよ。思いついたら、すぐ実行でなわけで、僕はその日、チャリンコに乗って出かけた。それは当てのない旅で、目的地のない冒険だった。僕はそこに、満を持して望んだわけだ。別段、大した自信があったわけじゃなかったけど。で、実を言えば、僕はもう家に戻る気はなかった。その時、僕はもうどこにも戻る気はなかったんだ。僕は、自分の家に帰ってくる事だけ、そしていつも通っているあの学校やこの街のいつもの登校路や、それから秋川や安達や担任の田口や小うるさい田村女史の顔だけはもう絶対に見たくないって思ってた。ほんとに、僕はそれらとは永遠に別れるつもりだった。...思えば、僕も若かったんだね。いや、今も若いけどさ。でも、人間、二週間でぐんと成長する事もあるんだぜ。唐突に背が伸びる子供のようにさ。

それで、僕はその日、昼飯のチャーハンをたらふく食って、それから母さんが出してくれたサラダをばくばく食って、そして家を飛び出た。誰も疑う者はいなかったね。「ちょっと、安達の家遊びに行ってくるから」と、僕は母さんには言った。母さんは「行ってらっしゃい」と言ったよ。そこには何も疑わしいものはなかった。僕はあくまで、善良純朴な普通の家庭の健全な高校生男子で、そして母さんは普通の家庭の普通の母親だった。そこには何ら、異変はなかった。しかし、異変があるとしたら、それは僕の心の中にあった。そしてその異変はもう、ブラックホールのように僕を包み込んでいた。僕は妹のハイヒールもどきみたいな靴をちょっと蹴っ飛ばしながら、慌てて家を出た。僕は、もう帰ってくる気はなかった。そうやって、僕の冒険は始まった。終わりも始まりもほとんどない、ほんの紙切れみたいな薄さの「冒険」が。...それでも、冒険だった事にはかわりはないんだよ。多分ね。

僕は自転車を漕いだ。家を出て、適当に道を曲がり、とにかくこのくだらない町から出ようとペダルを漕いだ。僕はただ闇雲にペダルを漕いだ。全く、そんな事をしたのは、小学校の時以来だったよ。漕いでいる内に、この『世界』が僕の眺望に入ってきた。いつもの街が僕の目には、これまでとは全く違う風景に見えてきたんだ。思えば、これまで僕はあるルーティーンの中にいた。家―学校―コンビニ―塾―安達の家。それらのルーティーン。そして未来に目を向ければ、それは家―会社―コンビニ―ファミレス―居酒屋、みたいなルーティーンになるのかもしれない。そして老人になれば病院―外―病院のルーティーンだ。そして、死。くそつたれ。僕は何かそんな事を思って自転車を漕いでいたんだよ。僕は春物の薄手のジャケットを着ていた。僕がママチャリで疾走している姿は正しく、CMになるようなできだった。そのイメージにぴったりだった。それで、僕が河原の土手を駆け抜けた後に、『新生活 四月一日からセール』なんて白文字でカッコいいフォントで文字がバーンと出るんだな。全く、僕はその時ほんとに絵になってたよ。ほんとにさ。

僕はとにかくそうやって自転車を漕いでた。気づけば僕は川沿いに走ってた。僕は川に沿って土手の上を疾走していた。まさしく、『青春少年』のごとくね。...全く、僕はほんとうんざりしていた。ほんとに。言っとくけど、僕は君にもうんざりしてたんだよ。何やかやとごちゃごちゃ言って、それでいつも他人面でああだこうだとうるさい君にもね。全く、君って奴は色々な事に口出す癖に、自分じゃ何一つやらないんだからな。「〇〇さん、ご成婚おめでとうございます」なんて書き込んだ後に君はすぐに、いつものエログロのネットサイトにアクセスしたりする。そしてその二つの行為の間に何ら、矛盾はない。...全くね。なんやかんやで僕は疲れたんだよ。ほんとに。君の存在を頭の中で思い描いて、それで君がごちゃごちゃ言うてるのに、頭の中で反応して、それが疲れたんだよね。要するに、僕は自分自身に疲れたんだよ。だって要するに、君は僕の頭の中の存在にすぎないわけだからね。

それで僕は自転車を漕いだ。途中、一度こけたよ。僕ってば、チャリンコの操縦があんまりうまくないんだな。昔からそうだった。でも、僕がそうやってスリップしてずっこけて、自転車もろとも倒れた時、周囲には誰もいなかった。うっとうしい車も走っていなかった。僕の体は、道の外れの雑草の中に投げ出された。そして僕はすぐに立ち上がろうと思ったけど、でもそんなすぐに立ち上がらなくてもいいという事に気づいた。僕はその時、永遠にその草むらに寝そべっていたいと感じた。うんざりだったからね、全てに。でも、そういうわけにはいかなかった。何故って、僕は虫が嫌いだからね。すぐに、僕は草むらに棲息しているうじうじした汚らしい虫の事を考えちまったんだよ。その時。だから、僕はちょっとの間、多分一分かそこらそこに寝そべってから立ち上がった。それで自転車を起こして、よろよろと、まるで百三十五歳のお爺さんみたいな動作で自転車にまたがって、それでまた漕ぎ始めた。怪我はどこにもなかった。ちょっと膝を擦りむいたくらいでね。で、その時には僕はもう何か、上機嫌な気持ちになっていたんだ。本当に、僕はその時上機嫌だったよ。世界が開けてきたわけだ、この僕にも。まるでコロンブスが始めてアメリカ大陸を見つけた、その時のように。ほんとに。

僕はしばらく、川の土手沿いに進んだ。そんな所を自転車で走るのは小学生以来だったよ。僕は小学生の時、友達と一緒にこの川に沿ってどこまで行けるのか、二人で試した事があるんだ。そいつの名は伊地知って言って、良い奴だったよ。僕達はものすごく仲の良い親友だった。でも、しばらくしてそうじゃなくなった。二人の間に何があったのかは未だに分からないし、覚えてもない。でもまあ、とにかくその時、僕らは目を真っ赤にして血相変えて、ただ土手沿いに走っていったんだ。当時流行っていたマウンテンバイクに乗ってね。僕らは、本当にどこまでも進んでいったね。その時。どこまでも、どこまでも。でも、途中で僕が音を上げたんだ。「疲れた」って。伊地知はそんな僕を見て、「じゃあ、帰ろうか」って言った。その瞳は優しくてね。僕はその目が今も忘れられない。僕らはその時、土手に座って休んでいた。辺りはもう夕光に包まれていた。今思えば、あれは正しく『少年冒険譚』だったね。当時はそう思わなかったけど。「帰ろう」って伊地知がまた言った。で、僕らは帰った。家についた時はもう暗くなっててね、親父に思い切り怒られたよ。それきり、この土手道は通っていない。

まあ、そんな事を思い出しながら僕はチャリンコを漕いでいった。僕はその時にはもう割りと浮かれた気分だったからね。色々な事がどうでも良くなっていた。その時には、僕はまだ家に帰るつもりはなかった。もう、どうでもよくなっていたからね。それで、僕はしばらく漕ぐと、疲れたんで、コンビニの位置をスマートフォンで調べて、それでそこに寄っておにぎりとお茶を買った。水分補給とエネルギー補給。でも、そのコンビニ出た辺りで、僕はスマートフォンなんて便利なものを持ってきた事を後悔していた。だって、それがあれば自分の位置がわかってしまうし、どこからかくだらない電話やメールがかかってくるかもしれない。ものすごくくだらない、どうでもいい電話やメールがさ。ちなみに、世間で蔓延しているメールや電話の97%は、全部くだらないしどうでもいいものだね。これは断言できます。そして残りの3%も、見方を変えればやっぱりくだらない、どうでもいいもの。これもまあ、断言できるかな。僕はまあ、そういう気分だったわけさ。君には分かるだろう?。...僕はコンビニを出ると、また土手に戻った。そしてそこからすぐの、川に沿ったグラウンドみたいなところに行って、そのベンチでお茶を飲み、おにぎりを食べた。実を言うと僕はもう疲れていた。僕ってば、全然筋肉がないんだよ。だからすぐにへばっちまってね。僕はパクパク食って、ごくごく飲んだ。そしてその時には、ぼんやりと家に帰る事を考えていた。僕はもう帰る事を考えていたんだ。正直に言うとね。人間、なかなか自分で張った網の中から出られないものだね。困った事に。

僕はお茶のペットボトルを手に持ちながら、ぼんやりと目の前の誰もいないグラウンドを見ていた。春の陽が当たって、全ては穏やかだった。僕は、これまでに自分が捨ててきたものについて思いを馳せていた。思えば、僕は色々なものを捨ててきた。そのものの価値も自分でよく分かっていもいなかったのに。例えば、少年野球。僕は、君は驚くかもしれないが、実は少年野球チームに入っていたんだよ。まあ、ピッチャーになれなくてすぐにやめちゃったけど。僕は少年野球というのには始めれば、ピッチャーになれるものだと思っていた。そしてバタバタとバッターを三振にしていく図をイメージしていた。でも、現実はそうじゃなかった。「お前は勝手なんだよ」、と小学校低学年の僕に、チームメイトの真島君は言ったな。「お前は勝手すぎるよ」。今では、真島君がそう言ってくれた事に感謝してる。...でも、小学校低学年の僕には少しばかり

きつい言葉だったかな。でも、そういう全てはもう過去になってしまった。僕は十六才。十六才で、何も大した事は経験していないのに、僕はもうおじいちゃんのような気持ちだった。まるで、戦争を五回ぐらい戦い抜いて、人間の悲哀と滑稽を全部眺めた老人のような気持ちがしていた。僕はそういう気持ちがしていた。ほんとに、そういう気持ちがしていたんだよ。ほんとに、ね。

僕はそういう茫洋とした気持ちで、春のグラウンドをじっと見ていた。すると、僕の目に急に涙が浮かんできた。僕は自分が泣いている事を知った――。うんざりだったよ。その自分の涙にね。僕はね、センチメンタルな事が嫌いなんだよ。君も知ってる通り。二十四時間テレビなんかでは、やたらとセンチメンタルを強制されたりするけど、それは全て、クソみたいなプロデューサーと広告会社によって計算されたものなんだ。何秒でどんな事が起こり、どのタイミングでCMに行くのか。そういう計算された全てを考えながら、涙を流す事なんてできやしない。うんざりなんだよ、計算されたセンチメンタリズムにはさ。だけど、その時の僕は涙が止まらなかった。多分、その時、僕はこれまでの自分の存在に涙を流していたのだと思う。これは、後から思った事だけど。僕以外の誰一人として、僕という存在を哀れんでやる奴がいなかったのだから、代わりに僕自身が僕に対して涙を流したというわけだ。全く、どうしようもないね。僕はそんな僕が哀れだという事を知っていた。でも、どうしようもないだろう？。一体、これ以上、僕にどうしてほしいって言うんだ？。

僕はひとしきり涙を流した。しばらくの間、僕は一人で馬鹿みたいに泣いていた。馬鹿みたいに。それで、やっと泣き終わると、僕は立ち上がった。そしてふいに、自殺してやろうと思った。どこかに、僕の手首を掻き切る丁度いい金属片か何かないかな、と周りを見渡したけど、僕の周りには何もなかった。でも、そこにはその代わりに素晴らしい物――その時の僕の気分に見合った素晴らしい物があった。それはぼろぼろの汚い硬球だった。僕はそれをおもむろに拾った。そして、僕はワールドシリーズ初戦に向かうエースピッチャーのように緊張した面持ちで、グラウンドの真ん中へと歩いて行った。僕はどンドンと歩いて行った。そして、僕は川の方に向かった。僕は外野のネットを通りすぎて、そして川に向かった。川幅はかなり広がった。対岸の下流の方で小学生達がボールを蹴って遊んでいるのが見えた。僕は思ったよ。僕にも、あんな頃があったんだって。でももし、僕が『あの頃に戻りたいのか？』と神様に聞かれたとしても、僕は『ノー』と答えただろうな。間違いなく。それで、僕はそのボールを思い切り、その川の上流に向かって投げた。それは間違いなく、僕の人生のハイライトだったね。そうさ、そのへっぽこの投球が、僕の人生の中で最も輝かしく、そして最も愚かしい一瞬だった。その一瞬は、東大の合格発表よりもずっと美しく気高く、そしてアホらしい瞬間だった。まあ、僕の心の目から見れば、って事だけどね。俗人から見れば、そんな場面には何の価値もないさ。でも俗人から見ればあらゆるものに何の価値もないんだろうけど。

ボールは少しだけ川をさかのぼって、ポチャンと音を立てて水面に落ちた。川は穏やかなものだったよ。僕はその投球を終えると、少し放心した状態になった。そして僕は、「よし、よくやった」と自分で自分につぶやいた。後から考えても、何がどう「よくやった」のかさっぱり分からなかったけど。でもまあ、とにかく僕はその時、そう思ったわけだ。僕はね。で、僕は次

に思ったんだ。『もう、帰ろう』って。実際、もう帰らなきゃいけない頃合いだった。どうやら、僕はまだこのくだらない人生を生きなきゃならないらしいな、とそう僕は思った。それは実際、くだらない事だけどね。でもまあ死ぬよりはマシだ。そうだろう、君？。

9

さて、それから二週間して、今になった。僕がね、このわけのわからないひとり語りを思い立ったのは、あのグラウンドでのクソみたいな投球があったおかげだと思っているんだ。そう、そのおかげだとね。あの後、僕は一人でとぼとぼ自転車漕いで、それで家に帰ったんだよ。それでいつもと変わらないような感じで、両親と妹に接した。母さんは「あら、遊びに行ったわりには早かったわね」と言ってたけど、でもそんなに疑ってなかった。それで僕も生返事して、シャワーを浴びたんだ。...全く、その時に僕は思ったんだよ。シャワーを浴びて、ぴちぴち水が跳ねる音を聞きながらね。『こいつはもう人生変えなくちゃならないな』って。僕はそう決意した。僕は、ゴールを決めた後のイタリア人ストライカーみたいに、胸に十字を切って、その事を自分自身に誓った。でも、僕は分かった。そんな事をしても自分の人生が決して変わらないという事が。僕はもう知っていたんだ。何をしようと、犯罪をしようと彼女を作ろうと友達を作ろうと受験勉強に必死に取り組もうと何をしようと、何をしようと変わらないっていう事が分かっていた。僕はそんな茫洋とした気持ちのまま、ずっと過ごしたんだ。二週間ほどね。それで、ふいに二日前に、思いついたんだよ。そうだ、何かを書こう、って。僕は何かを書かなければならない。とにかく、この世界に圧縮されて解き放つ事のできなかつた自分を解放できる、そういう何かを書かなくてはならない、ってね。それで、僕はこの文章——こいつを書いたんだよ。そう、その為にこいつを書いた。いや、語った。僕は語った。とにかくべらべらと。僕はとにもかくにも、語ったんだ。ここで、自分を。それは君も分かるよね？。君にはその事がよく分かるはずだ。きっと。そう、とにかく僕は語った。自分を。自分の事を。このクソツタレな日常に押しまわられていた自分を解き放つ為に。全部がクソツタレだという事を告発しながら。

でも、僕の話はここで終わり。僕のこの言葉には、何の意味もない。僕はその事を知っている。自分でも、僕はよく分かっているんだよ。高校二年生の、ガリガリでひよろひよろのしょうもない僕がこんな事をべらべら喋っても、何の意味もないって事がね。僕はその事をよく知っているし、こんな事をノートパソコンにこんな風にして打ち込んでいるくらいなら、それくらいならさっさと女の子にモテるための努力を始めた方がいいって事もよく知っている。でもね、まあ、なかなかどうしようもないんだよね。この辺りの事情はさ。この辺りはなかなか本人にしかわかんないものだと思うけどね。うちのクラスで斉藤って奴がいて、こいつは女友達がたくさんいて、いつもコンドーム持ち歩いている、なかなか「イケてる」男なんだけどさ。別に顔がかっこいいって事もないけど、でも、態度が気さくでいいんだよね。で、僕はこいつに一度モテる為の秘訣を聞いたんだよ。こっそりね。そしたら、こいつ、なんて答えたと思う？。「秘訣？。そんなの簡単さ。女の子に一生懸命尽くす事だよ」って。さすが、モテる男は違うな、って僕は思

った。正直にね、その時僕は感心したんだよ。でも、それと共に、「じゃあ僕はモテなくてもいいや」って素直に思った。本当に、僕はそう素直に思った。それが、僕の駄目な所なんだろうね。全く。

でも、まあいいか、とも僕は思っているんだ。だって、君が僕のこの長話を三日に渡って聞いてくれたわけだから。すまないと思っているよ、僕も。こんなにくだらな話べらべらと喋って。でも、僕には語る事が必要だった。それは、君にも凄くよく分かると思う。うん、君は分かる。僕はアンネ・フランクの日記を読んだ事があるけど、あんな感じかな。街路で砲火が聞こえているような状況で、アンネは自分のノートに「ねえ、キティ。今日、嫌な事があったの...」って記す。そういう感じ。雰囲気。そんな気がするんだよ、今、僕がやっている事も。まあ、僕のこの語りに、『アンネの日記』ほどの文化的価値があるかどうかは疑問だけどね。でも、まあいいんじゃないか。僕は僕だから。僕はとりあえず、これだけ自分を語った。僕は少しだけ満足さ。そう、少しだけ、ね。

さて、明日から僕はいつも通り、学校に行こうと思う。...実の所、今日は学校をサボったんだよ。これを書くために。風邪だって嘘ついてね。そうさ、母さんには僕は風邪で寝込んでから、あんまり部屋に入ってくれるなと言っておいてね。僕はまあ、不良生徒だね。忌野清志郎の『トランジスタ・ラジオ』。僕はあの曲が好きなんだよ。もう「トランジスタラジオ」なんて誰も知らないだろうけど。

さて、では、僕のこのくだらない独白もここで終わりにしようか。そろそろ。このお遊びも、ここでおしまい。僕はもうここで去るよ。僕はね、県内のとある高校に在籍している、平凡な高校二年生なんだよ。君は、僕の存在を疑っているかもしれないけど。だって、今ここにあるのは、この僕の言葉だけだからね。だから、君は僕の存在を疑っている。でもね、君に一つだけ、最後に言うておくけど、そんな疑いなんてものが一体なんだい？。僕は利口な奴が嫌いだね。なんでも裏をひっくり返して、それでわかったような顔をする。でも、『裏』だって誰かが作ったものかもしれないじゃないか？。君は、どう思う？。...まあね、とにかく、僕はこんな風に存在しているんだよ。本当に、実在の高校二年生としてね。僕は平凡だけど、確かに僕として生きている。あ、でも、この六十億だかいる、うじゃうじゃとした人類の数から見れば、僕なんてのはほんとに存在していないも同然かもしれないけどね。時々、僕は自分の身にそういうものを感じる事がある。つまり、僕は存在していないも同然じゃないのか、って。そう思う事はあるね。だから、まあ、この僕なんてのも、もしかしたら実際に存在していないのかもしれないね。だって六十億分の一なんて、もういないのも同然じゃないか？。ほんとに。うんざりするけどさ。でも、例えそうだとしたとしても、僕がここに残したこの言葉、それだけは真実だ。僕はそう思うね。うん、僕は断然そう思う。僕はそう思うんだよ。ほんとにね。

それでは、ほんとに、君とはここでサヨナラだ。多分、君と会う事はもうないだろう。もしこの先、君と僕が会う事があっても、君は僕の事など知らないし、僕も君の事を知らない。僕がここで出した名前というのみんな、実際の名前をもじった偽名だし、あるいは君はそれが偽名であるか本当の名前なのかも確かめる術はない。僕はね、まるで霧のような存在なのさ。晴れれば消えてしまう、そんなやつ。でも、僕がこうしてここで叫んだってというのは事実だよ！。それだけ

は事実だね。それでは、また。君と僕がこの先、現実生活で会う事があっても、君は僕の事を知らないし、僕も君を知らない。お互いすれ違って、それっきり。でも、それでいいと思うんだよ。僕は。ほんとにね。それでは、サヨナラ！。サヨナラ！。また。

@@@

...僕はノートパソコンに以上のテキストを打ち込むと、「ふうー」と溜息をついた。こんな事を書いて、それが一体何の役に立つだろうか？。僕はそう自問してみる。もちろん、何の役にも立たないだろう。僕はその事を知っている。だが、学校での僕は.....、いや、こんな事は考えたくない。学校での僕はただ、世界にがんじがらめに拘束されているに過ぎない存在だ。ただ、それだけの事だ。それ以上の事は全部、嘘だ。

僕はノートパソコンのフタをゆっくりと閉じると、蒲団の横に置かれたペットボトルのお茶と食べかけのおかゆに目を注いだ。僕は今、風邪を引いているという事になっている。母さんにはそう伝えておいた。僕はこのくだらないテキストを打ち込む為に、わざわざ学校をサボったのだ。僕は今、十六才だ。そして、今の僕にはどこにも出口はない。そう、どこにも出口はない。

僕はしかし、今書いたテキストに自分の魂を込めた。少なくとも、そのはずだった。そんな事に意味があるかどうかは分からないが、少なくとも、僕はこの三日間とても真剣だったはずだ。人から見れば、ふざけているようにしか見えなかったとしても。

僕は天井を見上げて、そして「はあ」と溜息をついた。僕の今後の人生はどうなるだろうか。十六才。日吉西高等学校。安達に秋川。それから、僕が好きだった吉川さん。高校に入った途端に一気に不良化した吉川さん。彼女に何が起こったのかは分からないが、しかし、彼女の中で何かが起こったのだ。彼女に変化を促す何か。そして、それが何かは僕は知らなかった。しかし、吉川さんが変わってしまったという事実を知るだけで、僕にはもうそれで十分だった。よく考えれば、僕は彼女をそんなに好きではなかったのだ。僕はそんな風に自分を説得する事に成功し

ていた。

それにしても、くだらないな、と僕は思った。何もかもが愚劣だ。とりわけ、この僕が。こんなくだらない文章を書く僕が。今の僕には、なんというか、カフカの気持ちがよくわかった。彼が自分の原稿を燃やしてくれと親友に頼んだ時、彼はその時に自分の人生も一緒に燃やしてくれ、という事も頼んでいたはずだ。だけど、僕にはそんな親友はいない。一人も。僕の破滅を託せる相手は、一人もいない。

だから、このテキストは自分で消すしかないのか。

だが、僕はそうはしなかった。僕はちょっとしたためらいと、ごく簡単な推敲の後、上記のテキストをある、小説投稿サイトにアップロードした。それが、誰のどんな反響も呼び起こさないだろう事は僕はよくわかっていた。でも、これが少なくとも、僕の短い人生の、その生きた証となるのだ。この十六年の、その人生の記念としての。

とはいえ、僕は死ぬつもりはなかった。僕は上記のごく些末なテキストだけを残して、そしてそれを(一応)世の中に出したら、それ以降はもう普通の高校生に戻るつもりだった。そう、あのアルチュール・ランボーのように。僕は砂漠に行くランボーのように、もう普通の高校生に戻るつもりだった。僕はこれからは、誰よりも率先して、一番馬鹿げた事に首を突っ込み、受験勉強を一生懸命にして、それからクラスのちょっと頭の足りない女の子と付き合って、デートしたりする事だろう。僕はこれから、そのように生きる。上記のくだらないテキストだけを、僕の墓標にして。さよなら、僕。

さあ、明日から僕は普通の高校二年生だ。従って、僕は幸福だ。そうだ、僕はこれからはもう幸福だ。だって、僕はこれからはもう、誰よりも『普通』なのだから。

そうだ、そういう事さ。そういう事。僕は立ち上がって、そして自分の部屋から出て行った。母親に見つからないようにして(見つかってもいいけど)、コンビニにお菓子を買に行くつもりだった。そして、もう二度とこの部屋に帰ってくるつもりはなかった。つまり、この部屋はあくまでも、これまでの僕のものであったのであり、僕がこれから住む世界は、これまで僕が生きていた世界にとっても似ているにしても、しかし、それはそれまでとは全く違う何かなのだ。そういう事だ。

僕は部屋を出て行った。そして家を出て行った。そして、二度と家に帰る事はなかった。

僕は『普通の高校二年生』となったのだ。今や。

普通の高校生になる為に

<http://p.booklog.jp/book/92126>

著者：ヤマダヒフミ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yamadahifumi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/92126>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/92126>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ